

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Ethnobotanical Notes on the Totora Reed in Andes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004509

アンデス地域, トトラの民族植物誌

山 本 紀 夫*

Ethnobotanical Notes on the *Totora* Reed in Andes

Norio YAMAMOTO

Totora (*Scirupus californicus*) is a bulrush widely distributed in the Americas. In the Andes of South America it grows wild in marshy localities from the coastal lowlands to the highlands. In the Andes it has been exploited by man, as is evident from archaeological and historical records. The *totora* is still locally important, and is used, *inter alia*, for food, forage, fuel, house building (wall and roof), mats, floats and sails for fishing, and for the construction of artificial islands to provide dwelling space.

Based on fieldwork conducted three times, from 1977 to 1979, this article discusses the taxonomy, uses and cultivation of *totora* reed in highland Ecuador (among the Otavalo people), the northern coast of Peru and the Lake Titicaca area of Peru (Uro), and in Bolivia (Aymara). The four different types of reed float found in these areas are examined in relation to the physical environment, in terms of form and framework, weaving technique and usage.

- | | |
|-----------------|----------------|
| I. はじめに | 5) 葦舟の比較考察 |
| II. 調査および調査地の概要 | 2. エステーラとバスケット |
| III. トトラの分類と分布 | 1) エステーラ |
| IV. トトラの利用 | 2) バスケット |
| 1. 葦舟 | 3. 浮島 |
| 1) 葦舟の材料 | 4. 食料, その他 |
| 2) エクアドル北部高地の葦舟 | V. トトラの栽培 |
| 3) ペルー北海岸の葦舟 | VI. おわりに |
| 4) ティティカカ湖の葦舟 | |

* 国立民族学博物館第4研究部

I. はじめに

1977年6月末から9月初旬にかけての約2カ月間、わたしは南アメリカのアンデス地域で、本館の資料収集調査に従事した。本稿は、主として、この収集調査で得られた資料をもとに、トトラ (totora) の呼称をもつ植物の分類と分布、トトラを素材とするモノの製作技術と利用法、トトラの栽培方法などを報告、これらの報告をとおしてアンデス地域におけるトトラ利用の発達の意義と背景について若干の考察を試みようとするものである。

トトラは栽培植物ではなく、アンデス地域に自生する野生の植物であるが、ティティカカ湖の葦舟の材料として利用されることで、よく知られている(写真1)。また、アンデス高地では、トトラは原住民、インディオによって、家の屋根、壁、マットなどの材料として、さらに食料、燃料、飼料として利用されるなど、さまざまな用途をもち、きわめて重要な植物となっている。したがって、トトラおよびその利用についての記述は少なくなく、とくに葦舟は、その材料および形態が特異なためか、16世紀のクロニスタの記録をはじめとして、今日に至るまで数多くある[アコスタ 1966 (1590) COBO 1890; YACOVLEFF y HERRERA 1934; LA BARRE 1937-1938; TSCHOPIK 1963; EDWARDS 1965; ŠOLC 1967; VARCARCEL 1978 ほか]。

しかしながら、これらの記述のほとんどがきわめて断片的であり、単なるモノの紹介にとどまっている。トトラと呼ばれる植物が具体的には何であるのか、トトラを材料としてつくられるモノの製作技術やトトラの利用方法などについて、くわしく記述したものは、きわめてまれである。たとえば、葦舟はアンデス各地でみられ、またア



写真1 ティティカカ湖の葦舟(ウロ族)とトトラ。周辺の植物はすべてトトラである

ンデスの伝統的物質文化のなかでは、もっともよく知られたものであると思われるが、それさえも製作方法までくわしく記述したものとしては、ボリビア領アイマラ (Aymara) 族の葦舟についての Šolc の報告が唯一といってよい状態である [ŠOLC 1967]。

一般に、従来のアンデスにおける民族誌などにおいては、このトトラ利用にかぎらず、物質文化の材料や製作技術をくわしく記述したものは、たいへん少ない。ところが、近年の工業製品の普及、交通手段の発達などのいわゆる近代化の影響をうけて、アンデスの伝統的な物質文化は急速に変化、消滅しつつあり、当然それにとまなう民族技術も消滅する傾向にある。

本稿で、葦舟を中心として、トトラ利用の実態をくわしく報告しようとする意図も、トトラを素材とするモノやその利用も早晩なくなってしまうかもしれない、とかがんがえたからにはほかならない。

Ⅱ．調査および調査地の概要

トトラを材料として製作されるもののなかで、最大のもは葦舟である。今回の調査で、この葦舟を収集の対象としたのは、それが現在アンデス地域で展示標本資料として入手できる最大のもので、博物館においても展示効果が大きいとかがんがえたからである。したがって、調査は、現在なお葦舟を製作している地域を中心におこなった。調査地は、エクアドル北部高地、ペルー北海岸、ペルー領ティティカカ湖、およびボリビア領ティティカカ湖の4地域である。

このうち、ボリビア領ティティカカ湖をのぞく、上記三地点で、葦舟の製作を依頼し、製作技術や利用法を観察、材料となるトトラは採集し、腊葉標本をつくって、帰国後同定した。これらの葦舟、附属品、製作道具および材料のトトラは、いずれも現在本館に収蔵されている。ボリビア領ティティカカ湖の葦舟については、先述した Šolc のくわしい報告もあるため、製作の一部の観察と聞きとりにとどめた。これらの調査地での滞在中、周辺地域を含めて、葦舟以外のトトラ利用、その他のトトラにかんする情報を集めた。

なお、この収集調査では、各地点での滞在期間はいずれもせいぜい一週間と短く、調査は充分ではなかった。そのため、その後1978年と1979年の2回、アンデスを訪れる機会を得たので、これらの調査地を再訪して短期間ながら追加調査をおこなった。調査地は図1の環境区分図のなかに示した。この図を参考にしながら以下に、各調査

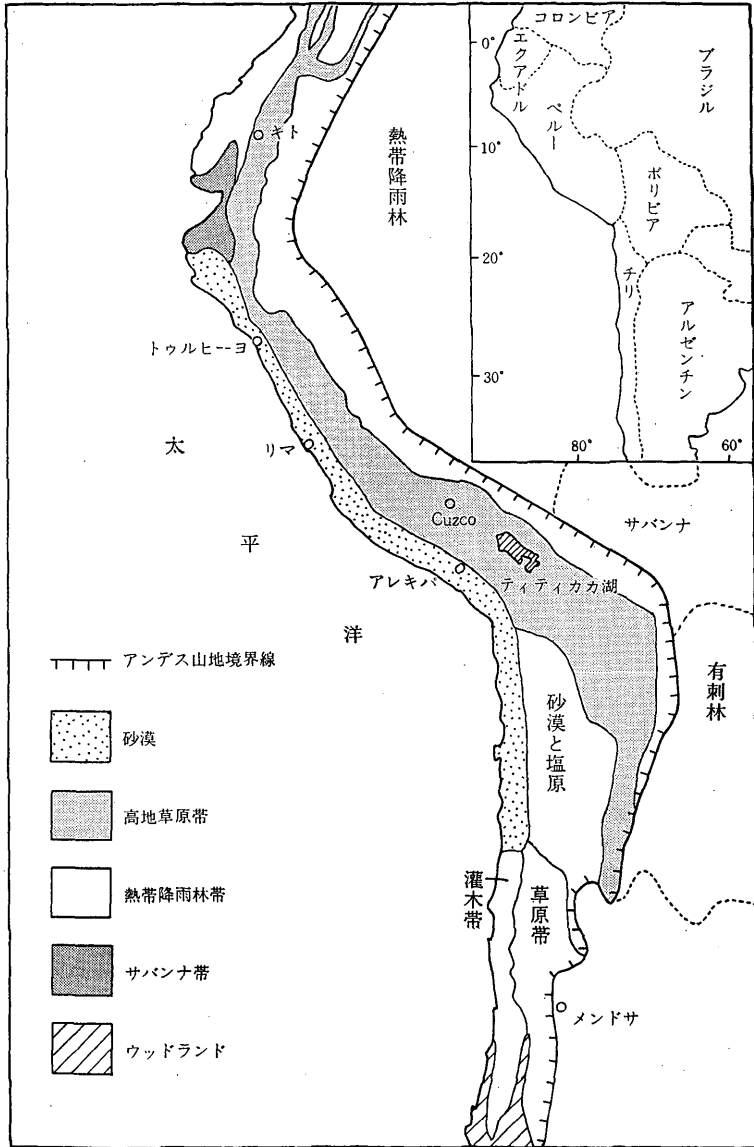


図1 アンデス地域の環境区分図 (C. Troll [1968] を簡易化)

地の概要について述べておきたい。

エクアドルでは、北部高地のインバブラ (Imbabura) 地方のヤウアルコチャ (Yahuarcocha) 湖とサン・パブロ (San Pablo) 湖で調査をおこなった。いずれも、エクアドルの首都のキト (Quito) 市から北方に数十 km の距離にあって、前者はイバラ (Ibarra) 市の郊外、後者はオタバロ (Otavalo) 市の郊外に位置している。湖面標高

はともに 3,000 m 前後で、湖の大きさは正確にはあきらかでないが、ヤウアルコチャ湖の方がすこし小さくて、周囲約 1 km あまり、サン・パブロ湖は数 km くらいである。このうち、葦舟を観察、収集したのはサン・パブロ湖である。ヤウアルコチャ湖でも葦舟利用がみられるとの報告もあった [EDWARDS 1965] が、現在はすでに葦舟製作をおこなっていない。

エクアドル北部高地は、織物とその交易でよく知られているオタバロ (Otavalo) 族が居住しており、さきあげたオタバロ市やイバラ市は、これらオタバロ族の交易の中心地となっていて、週に一度ごとに大きな市がひらかれる。オタバロ族の生業は、織物のほかに、トウモロコシ、小麦、ジャガイモなどを中心とする農業である。サン・パブロ湖およびヤウアルコチャ湖の湖畔の住人も、このオタバロ族であるが、この両地域に特徴的な点は織物や農業のほかに、トトラを利用して、エステラ (estera) とよばれるマットを製作し、それを先述したオタバロ市やイバラ市の市で販売することが生業の一部となっていることである。

植生のうえでは、これらの両地域はともに、図 1 に示されているように草地帯に属している。現在は、他のアンデス高地と同様、オーストラリアから導入されたとされるユーカリがまばらにみられるが、基本的には高地の寒さのために草地帯となるところである。葦舟およびマットに利用されるトトラは、ヤウアルコチャ湖もサン・パブロ湖もともに、その湖畔の浅瀬に自生している。

ペルーの海岸地帯での調査地域は、北部のトゥルヒーヨ (Trujillo) 市あたりから南部のアレキパ (Arequipa) 市にちかいカマナ (Camana) 市までのほぼ全域にわたる。この地域は、アンデス山脈からながれおちる河川によってつくられるオアシス状のところを除けば、大部分が砂漠地帯となっている (図 1)。リマ市からトゥルヒーヨ市にかけての中央海岸から北部海岸地域にかけては、マットづくりなどのトトラ利用が点々とみられるが、葦舟製作をおこなっていたのはトゥルヒーヨ市郊外のワンチャコ (Huanchaco) 村だけであった。

ワンチャコ村は、海岸に面した、戸数 100 戸ばかりの小さな漁村で、生業は葦舟をつかっておこなわれる小規模な漁業と、やはりトトラのマットづくりである。ワンチャコ村の住民は、いずれもいわゆるメスティーン (mestizo) で、スペイン語のみが話される。この葦舟やマットづくりの材料となるトトラは、村の周囲には自生していないので、野生のものではなく、栽培したものがつかわれる。

3 番目の調査地、ティティカカ湖は、湖面標高 3,800 m あまり、面積約 8,500 km² で、この湖畔にトトラが自生している。ただし、トトラは湖畔すべてに、均一に分布

しているわけではなく、ティティカカ湖の北部と南部に、とくに豊富に自生している。そして、この北部で、トトラを利用して生活しているのがウロ (Uro) 族で、南部がアイマラ (Aymara) 族である。

ウロ族は、ウル (Uru) 族ともいわれ、言語的にはアンデス高地の農牧民であるケチュア (Quechua) 族やアイマラ族とも異なるウル・チパヤ (Uru-Chipaya) 語族に所属する。ウル・チパヤ語族としては、その居住域はペルー領ティティカカ湖に浮島をつくって居住するグループのほか、湖岸の北側とボリビア領ポーポ (Poopo) 湖畔にも居住しているグループがある [LA BARRE 1963]。調査をおこなったのは、浮島の方で、これまで浮島以外のグループについては調査の機会を得てないので、本稿ではウロ族という場合、この浮島に居住するグループに限定する。

この浮島に居住するウロ族は、現在人口約1,000人~1,500人といわれ、その生業は漁業と狩猟であるが、このウロ族を特徴づけているのはトトラに全面的に依存した生活である。この特異な生活のために、最近では一部の浮島は観光地化しつつあるが、このトトラに全面的に依存した生活は変わらない。ただし、湖岸に住むアイマラ族の影響で、ウロ語をはなす者はほとんどなく、普通はアイマラ語がはなされ、スペイン語も普及しつつある。

ボリビア領ティティカカ湖では、スリキ (Suliqui) 島で調査をおこなった。このスリキ島および周辺部はすべてアイマラ族が居住しており、農耕のかたわら小規模な漁業もおこなっている。

このティティカカ湖およびその周辺部も、エクアドル北部高地と同様、植生的には草地帯であって、樹木は移入されたユーカリのほかには、若干の灌木のみみられる程度である。したがって、ここでとりあげた調査地は、海岸砂漠地帯と高地草原地帯で植生的にはまったく異なっているものの、一般に船の材料となる樹木が得にくいところに位置しているという点では共通しており、トトラが船の材料として利用される生態的背景がうかがえる。

Ⅲ. トトラの分類と分布

葦舟づくりを調査した4地点、すなわちエクアドル北部高地、ペルー北海岸、ペルー領ティティカカ湖、そしてボリビア領ティティカカ湖での、葦舟の材料はいずれもトトラ (totora) とよばれる植物であった。このうち、ペルー北海岸のワンチャコ村では、後述するように、栽培下にあるトトラを利用してしたが、その他の地域ではい

いずれも野生のものを採集利用していた。

これら4地点で観察されたトトラは、いずれもきわめてよく似た特徴をもっている。すなわち、それは湖畔の浅瀬や湿地などの沼沢地に群生して生育している多年草で、その根茎は太く、長く、横にはい、節からひげ根をだす。また、この節から、直径1~2 cm、草丈2~4 mに達する、ほぼ円柱形の茎が直立している。この茎は、内部がつまっております、表面はなめらかで、濃い緑色を呈している。茎の先端は細く、その先端より、多数の小穂からなる花序がある(写真1)。

採集後の腊葉標本で同定した結果、これらのトトラとよばれる植物はいずれもカヤツリグサ科ホタルイ属の *Scirpus californicus* であった。Koyamaによれば、*S. californicus* は subsp. *californicus* と subsp. *Tatora* の二つの亜種にわけられ [KOYAMA 1963], Heiser はこれらの亜種が別種である可能性を示唆している [HEISER 1979]。subsp. *Tatora* と subsp. *californicus* のちがいのうちで、もっとも区別しやすい特徴は、前者の花序が密であるのに対し、後者のそれは疎になっている点である。この特徴に着目して、上記のトトラを分類すると、ティティカカ湖のものはいずれも *S. californicus* subsp. *Tatora* で、ペルー北海岸やエクアドル北部高地のトトラは subsp. *californicus* であった。

その分布は subsp. *californicus* が北アメリカのカリフォルニア南部から、メキシコを経て、チリ北部やアルゼンチンまでときわめて広いのに対し、subsp. *Tatora* の分布はボリビア、ペルー、チリなどの南アメリカに限定される。また、一般に subsp. *Tatora* は subsp. *californicus* よりも高地部に分布しているが、*S. californicus* の種レベルでは海岸の低地部から標高4,000 m以上の高地まで分布している。そして、その自生地は、湖畔、川の堤防、沼沢地などであるとされる [KOYAMA 1963; HEISER 1979]。

じっさいに、アンデス地域では海岸低地部からアンデス高地部までの湿地状になったところでは、ごく普通にこの植物がみられる。しかし、花序の構造上の特徴をのぞけばこれらの二つの亜種はほとんど区別がつかないものであり、利用の点でもちがいはないようである。したがって、以下の報告ではこれらの亜種を区別しないで、*S. californicus* をトトラとして記述してゆくことにする。

ただし、アンデスの総ての地域で *S. californicus* が *tatora* とよばれているわけではない。たとえばリマ(Lima)市にちかい中央海岸地域では、*tatora* という呼称はガマ(*Typha* sp.)に与えられ、*S. californicus* はフンコ(junco)とよばれていた。さらに、Towleも、ペルーでガマが *tatora* とよばれていることを報告している。ペルー北海

岸地域では、*S. californicus* は *tatora* とよばれるが、フンコはカヤツリグサ属やホタルイ属のなかで草丈の小さいもののほか、イグサ科の *Juncus* spp. などの総称となっている。Sagastegui もこの北海岸で草丈の小さいホタルイ属植物の *S. olney* やカヤツリグサ属の *C. vulgar* が *junco* とよばれていることを報告しているほか、コロンビアでも *S. validus* が *junco* とよばれる [SAGASTEGUI 1973: 137; PEREZ 1978: 281]。また、Heiser によれば、ペルー中央高地では *tatora* は *Juncus* sp. のことで、*S. californicus* は *merme* とよばれている、という [HEISER 1979: 222]。

表1はこれらをまとめたものであるが、このように、*tatora* とよばれる植物は、地域によっては、必ずしも *S. californicus* ではないことがあり、また *S. californicus* は *tatora* とよばれていないことがある。ところが、これまでのモノグラフなどでは *tatora* や *junco* としか記述していない場合が少なくないので、個々の報告を読むときは注意する必要がある。

なお、ウロ族は、トトラをさらに、二つのグループにわけます。オルコ・トトラ (*orko totora*) とカチュ・トトラ (*kachu totora*) である。オルコ、カチュは、それぞれオ

表1 アンデス地域におけるトトラおよび類似植物の呼称と学名

地 域 (部族名)	呼 称	学 名	報 告 者※
コ ロ ン ビ ア	<i>junco</i>	<i>Scirpus validus</i>	Perez [1978]
エクアドル高地 (オタバロ族)	<i>tatora</i>	<i>S. californicus</i> <i>subsp. californicus</i>	
ペルー北海岸	<i>tatora</i>	<i>S. californicus</i> <i>subsp. californicus</i>	
	<i>junco</i>	<i>S. olney, Cyperus corymbosus</i>	Sagastegui [1973]
ペルー中央海岸	<i>junco</i> <i>tatora</i>	<i>S. californicus</i> <i>Typha</i> sp.	
ペルー南海岸	<i>matara</i>	<i>S. californicus?</i>	
ペルー中央高地	<i>tatora</i> <i>merme</i>	<i>Juncus</i> sp. <i>S. californicus</i>	Heiser [1979]
ペルー南部高地 (ウロ族)	<i>tatora</i>	<i>S. californicus</i> <i>subsp. californicus</i>	
ボリビア北部高地 (アイマラ族)	<i>tatora</i>	<i>S. californicus</i> <i>subsp. californicus</i>	
アルゼンチン	<i>junco</i> <i>tatora</i>	<i>S. californicus</i> <i>T. angustifolia</i>	Towle [1961]

※無記入は筆者の調査にもとづく。

ス、メスの意味なので、オスのトトラとメスのトトラのグループにわけるのである。ウロ族の表現をかりると、オルコ・トトラはカチュ・トトラより、草丈が大きく、茎が太く、丸い。また、オルコ・トトラが一部地域でしかみられないのに対し、カチュ・トトラはどこにでもある、といわれる。これまでの報告からみるかぎり、ティティカカ湖畔に自生するトトラは、すべて *S. californicus* subsp. *Tatora* とかんがえられ、またこの種に雌雄異株は知られていないので、この二つのトトラのちがいは、異なる環境条件によって生じた生態的変種である可能性がある。ウロ族は、後にくわしく述べるように、トトラを葦舟や彼らの居住する島、家などの材料とするほか、食用や燃料としても利用し、これらの用途に応じて、オルコ・トトラとカチュ・トトラをつかいわける。したがって、このウロ族によるトトラの分類方法は、ウロ族とトトラとの長く、かつ密接な関係を示しているものと思われる。

Ⅳ. トトラの利用

1. 葦 舟

1) 葦舟の材料

葦舟は、英語で reed boat, スペイン語で balsa (筏) の名前で、一般に知られているが、はじめにこの名称について検討しておきたい。というのは、葦舟や reed boat の呼称からは、これらの舟がアシを材料としているかのように思われるが、前章でみたように、すくなくとも今回観察された葦舟の材料はいずれもアシではなく、トトラであった。すなわち、アシがイネ科の植物であるのに対し、トトラはカヤツリグサ科ホタルイ属の *S. californicus* で、植物学的にはアシとはまったく異なるものを材料としているのである。

あし(葦)舟や reed boat の名称が、いつ頃から、何故、つかわれるようになったのか、明らかではないが、はたしてアンデス地域でアシを材料とする舟は存在するのであろうか。アンデス地域で葦舟の材料について言及している報告について検討しておこう。ティティカカ湖の葦舟の材料については、Tschopik, Šolc, Towle たちは *Scirpus tatora* [Tschopik 1945: 519; Towle 1961: 26; Šolc 1967: 95], Cardenaz は *S. riparius* [Cardenaz 1969: 81], Sagastegui は *S. californicus* subsp. *tatora* [Sagastegui 1973: 1173] と報告している。これらのうち、*S. tatora*, *S. riparius* は現在 *S. californicus* のシノニムとされているので、ティティカカ湖の葦舟については、

すべてアシではなくトトラを材料としているとみてよいだろう。

いっぽう、アンデス各地の葦舟の材料についてくわしく調査した Edwards によると、アシ (*Phragmites* sp.) を材料にしている葦舟が、つぎの二地域でみられる。それはペルー南部海岸とチリ海岸で、後者の地域ではさまざまな植物が材料となるが *Ph. communis* がもっとも普通の材料であったとされる [EDWARDS 1965: 14]。ところが、これらの地域は後述するように、現在葦舟は消滅しているか、もし利用されていたとしてもきわめてまれな状態になっていると想像される。つまり、現在葦舟がみられる地域での舟の材料はほとんどがトトラである。したがって、この種の舟を葦舟と呼ぶことは厳密には不相当であると思われるが、すでに葦舟および reed boat の呼称が一般化しているため、ここでは植物を素材にした舟というほどの意味で、従来の呼び方に従っておくことにする¹⁾。

なお、Yacovleff y Herrera [1934-1935] は、ガマを材料にした葦舟を報告しているが、これは同定の誤りである可能性がある。さきにもたようにガマとトトラは同じような環境のところに自生し、ときにガマが totora と呼ばれる。しかも、トトラにくらべるとガマの茎は太く、かたいため、これで葦舟をつくるのは、かなり困難がともなうと想像されるからである。

2) エクアドル北部高地の葦舟 (標本番号 12962, 12963)

(1) 形態

オタパロ族は、葦舟をスペイン語でカバジート・デ・トトラ (caballito de totora) またはバルサ・トトラ (balsa totora) と呼ぶ。カバジートは馬のことであり、葦舟をまたいで乗る格好が、乗馬のときのそれによく似ているところから由来しているものとみられる(写真2)。いずれにしても、先述したようにオタパロ族は普通ケチュア語をはなしているが、葦舟にたいするケチュア語による呼称はみとめられなかった。

サン・パブロ湖で観察したかぎりでは、すべての葦舟は同じ大きさ、形態をしている。すなわち、その一端が円錐形をした円柱の1本の胴でできている。収集標本を例にとって、大きさを示すと、全長が 315 cm, 最大幅は 38 cm である。中央部は円柱というより、厳密にはやや楕円形をしており、30~40 cm 間隔に、縄をつかってトトラを

1) 葦舟は、スペイン語で balsa (筏) と呼ばれ、英語でも raft や float の名称が与えられることがある [EDWARDS 1965; JOHNSTONE 1980]。日本語でも、筏船という表現がある [伊藤 1975]。したがって舟という語が適当であるかどうか、という問題についても議論の余地は残されている。しかし、筏と船のあいだに定義上の厳密なちがいはないとされるので (神戸商船大学松本哲教授の御教示による)、この点についても従来の呼び方にしたがっておく。

束ねている。この縄はカブヤ (Cabuya, *Agave sp.*) がつかわれる。先端部は、心もちそりがつけてある。

(2) 製 作 法

〈採集〉 葦舟の材料となるトトラは、湖畔に豊富に自生している。葦舟をつかって、このトトラの茂みに乗り入れ、ナイフ (cuchillo) で、できるだけ茎の根元から切りとる。切りとられた茎は水面に浮き上る。必要量が採集できたところで、これらのトトラをヒモのかわりにして束ね、葦舟の後部にゆわえて運ぶ。



写真2 エクアドル、サン・パブロ湖の葦舟

〈乾燥〉 家にもち帰られたトトラは2〜3日から約1週間、かげ干しされる。家の軒下などの日蔭で、いくつかの束にしたものを壁により立たせて、乾燥する。直射日光のもとでは、急激に乾燥することになり、その結果、トトラの茎がひび割れを起す。また、横にして地面に置くと、まがりが生じるとされる。

〈選別〉 葦舟は、基本的に三つの長さの異なるトトラ束からできているため、これを選ぶ作業がある。約1mの長さの短いもの、約2mの中間の長さのもの、そしてそれ以上の約3mの長いトトラの三つのグループにわけられる。そして、もっとも短いものを除く、残りの二つの長さの異なるトトラは、それぞれ等量ずつ、さらに二つの束にわけ、仮締めしておく。

〈芯束づくり〉 一番短いトトラは、これで船体の芯となるものをつくる。この芯束は、根にちかい方の太い茎を約1mの長さに切ったもので、これを方向をそろえて束ねる。根元の方の部分が直径約30cmくらいの太さになれば、この束の前後をやはりトトラをつかって、つよくむすぶ (写真3)。

〈船体づくり〉 舟をつくる作業場は平坦地が選ばれ、そこに1m前後の縄を、30〜40cm間隔に、平行に8本ならべる (写真4)。この縄は、葦舟の胴を締めるためのものである。ついで、これらの縄とは直角にその上に、もっとも長いトトラ束のひとつを置き、仮締めのトトラをとく。そしてトトラの茎を均一な厚さになるよう縄の上でひろげる (写真5)。

さらに、これらのトトラのちょうど中央に、中間の長さのトトラ束のうちのひとつ



写真3 芯束をつくる

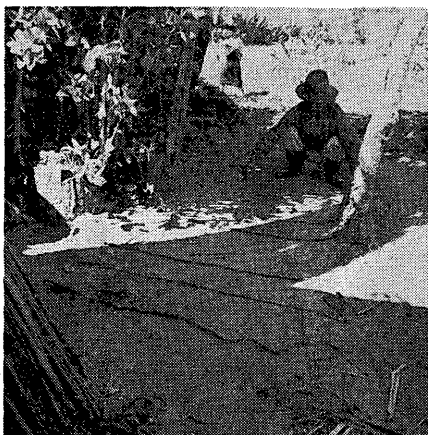


写真4 胴を締めるための縄を置く



写真5 もっとも長いトトラの茎を下に敷く

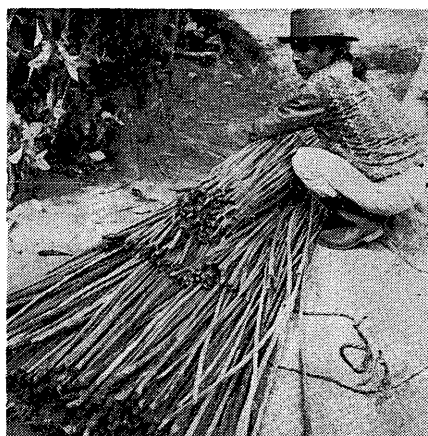


写真6 長さの異なるトトラをつみかさねる

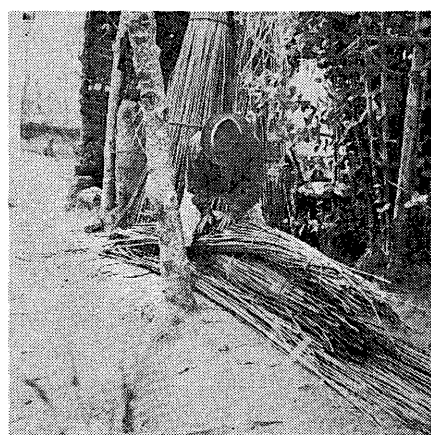


写真7 芯束を中心に太いトトラ束をつくる

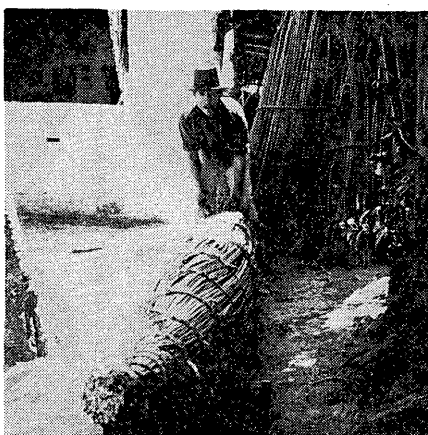


写真8 船首をヒモで締めて細くすれば完成

を置く。同じように、束ねていたトトラをといて、さきに敷いたトトラの上に同じ厚さになるよう積みかさねる。この上に、芯束となる短いトトラ束をのせる。この芯束もトトラで束ねてあるが、この芯束はそのままの状態、次の作業に移る。

芯束と中間の長さのトトラを一体にして、より太いトトラの束をつくる。このために中間の長さのトトラ束を、芯束の上ののせる。この中間の長さのトトラ束は先端部と中央部がトトラで仮締めしてあるが、仮締めをしていない後部のトトラを芯束にそわせる。また下に敷いてある、これと同じ長さの中間のトトラも、下からこの芯束にそわせて、芯束を中間の長さのトトラでおおう（写真6）。

次いで、中間の長さのトトラ束の仮締めにほどこき、後部からじょじょに芯束と中間の長さのトトラの束を一体化してゆく。この作業をおこないながら芯束からすこしずつトトラをひきだし、全体として均一な太さの1本のトトラ束となるようにする。また、長さの異なる2本のトトラの束が一体になった部分から、ヒモの代用のトトラで束ねてゆく。最後に、先端部を束ねていたトトラもといて、同様の作業をくりかえす。

今度は、この太いトトラ束を作ったのと同じ要領で、より太い1本のトトラ束を作る。この太いトトラ束の上に、仮締めした長いトトラ束を乗せ、さきに下に敷いた縄で、太いトトラ束を中心として、上下からこれをおおい、仮締める。そして、これに体重をかけて、後部から上のトトラをずらし、一体にしてゆく（写真7）。

船首にあたる部分は、中央のトトラ束からのひきだしを少なくし、じょじょに細くなるようにする。形がととのったところで、再度縄を強くしめ上げる。最後に、船首のトトラをヒモでしめて細くすれば完成である（写真8）。

この作業は、船体づくりだけで完成まで、一人で約2時間足らずである。

(3) 利 用 法

葦舟は、使用のたびに、家から湖へ運ばれる。つまり、葦舟は使用後は家にもち帰られる。盗難をさけるためとされるが、常時侵水状態にしておくことはトトラの浮力をなくすことにつながる。それにもかかわらず使用できる期間は約1～2カ月である。使う時は葦舟を背負い、湖に運び、浅瀬に浮べて、葦舟のほぼ中央、ペチョ (pecho) とよばれる部分に乗る。葦舟の胴の上で正座をするような格好で座る。体重によって中央部が沈み、前後端部はもち上る。とくに先端部は完全に浮き上がった状態となる（写真2）。

船をあやつる道具は、カイ (remo) である。長さ約1mの棒に、長さ約30cm、巾20cmの板をうちつけたものがつかわれる。船は円底なので安定が悪く、けっして立ち上ることはなく、すわったままカイを使用する。また、強い風、波があると著しく

安定性を欠くので、ほぼ静水状態の時だけ、つかわれる。

用途は、もっぱら漁撈とトトラの採集活動のためである。交通手段としての用途もあるかもしれないが、それは主要な用途ではなさそうである。湖自体がそれほど大きなものではなく、また葦舟の使用のたびに家から運ぶことをかんがえると歩いた方が早いのであろう。漁撈は一本釣で、対象魚はマスである。

さきに述べたように、このサン・パプロ湖およびヤウアルコチャ湖に自生するトトラは一般にエステーラとよばれるマットづくりにつかわれ、その製作、販売は重要な生業の一部になっているが、そのためには大量のトトラが必要となる。湖畔に自生するトトラは浅瀬とはいっても水深 1 m 以上のところから生えており、トトラ舟をつかうことが必要となるのである。トトラの採集方法は、さきに葦舟製作の項で述べた。

3) ペルー北海岸の葦舟 (標本番号 12921, 12922)

(1) 形 態

ワンチャコ村でも、葦舟はオタパロ族とおなじように、カバジート・デ・トトラ (caballito de totora) とよばれる。やはり、葦舟に乗った姿が、馬に乗ったそれに類似していることに起因するものとおもわれる。ワンチャコ村の葦舟はすべて同じ大きさと型をしており、オタパロ族の葦舟を平行にふたつならべて一体にしたような形態をしている。オタパロ族のものと著しく違う点は、流線形をした船体と大きくそり上った船首である (写真9)。

船体は、スペイン語で“棒”または“棒きれ”を意味するバストーン (bastón) とよばれる2本のトトラ束できている。

このバストーンは全長が 415 cm とオタパロ族の葦舟よりはるかに長いが、太さは最大のところで 33 cm とオタパロ族のものより小さい。実際は、この2本のバストーンを一体にした双胴の船なので、船体の幅は、このバストンの2倍となっていて、葦舟自体で比較すれば、長さも幅も、ワンチャコ村の方がはるかに大きい。

船体の後部から 1/3 くらいのところをもっとも幅が広がっていて約

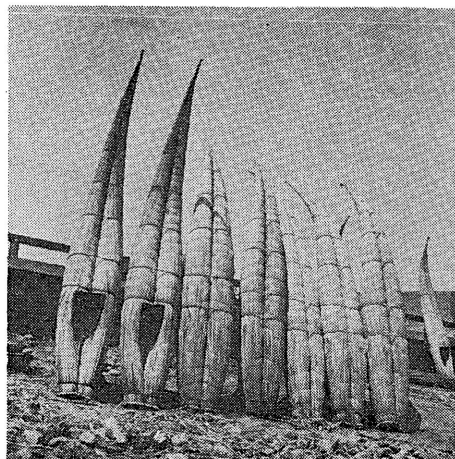


写真9 ワンチャコ村の葦舟

60cm, そこから前後にやわらかい曲線を描いて次第に細くなり, 後端部は約 40 cm の幅となっている。この後端部から最大幅をもつ船体後部の 1/3 は, 両側に舷側をもつ船倉のようになっていて, この部分はとくにカヘタ (cajeta) とよばれる。カヘタは, 船体の後端部から次第に深くなり, 最大幅をもつ部分でもっとも深く約 28 cm, 幅が 32 cm となっている。

じつは, この船体を構成する 2 本のバストーンは, それぞれ 2 本の長さの異なるトトラ束でできている。長いトトラ束のなかに, 短いトトラ束をもぐりこませた形となっていて, カヘタのもっとも深い部分は, この短いトトラ束の後端部にあたるところである。この長い方のトトラの束はマードレ (madre), 短い方はイーホ (hijo) とよばれる。マードレ, イーホは, スペイン語でそれぞれ 母, 息子 を意味するが, これはバストンの構造が懐胎した状態に類似しているためであるとされる。

(2) 製 作 法

〈採集〉 ワンチャコ村では, トトラは栽培したものをつかう。栽培方法などについては後述するが, トトラは各家族所有のポソ (pozo) とよばれる水田状のところ栽培されているので, ここで採集する。鎌 (hoz) で, 根元から切りとって集める。

〈乾燥〉 オタバロ族や後述するウロ族の場合, 船用のトトラの乾燥は曲りが生じないよう, かげ干しされるが, ここでは砂浜に広げて乾燥する (写真10)。したがって, 数日でほぼ乾燥する。

〈トトラの選別〉 作業は海にちかい砂浜でおこなう。船の完成後, 海まで運ぶ距離を小さくするためである。さきに述べたように, ワンチャコ村の葦舟は, 2 本ずつ長さの異なる計 4 本のトトラの束でできているので, まずこれらを選ぶ。約 2 m の短いトトラと 3 m あまりの長いトトラにわけ, これらをさらにほぼ等しい量となるようふたつにわけ, 砂浜に平行に広げる (写真11)。

〈胴づくり〉 2 本の胴, つまりバストンの製作方法はまったく同じで, 最後に一体にするときまで別個に作業をおこなう。まず, ひろげられた長い方のトトラを束ね, 太い糸で仮締めしてゆく (写真12)。このトトラの束は茎の

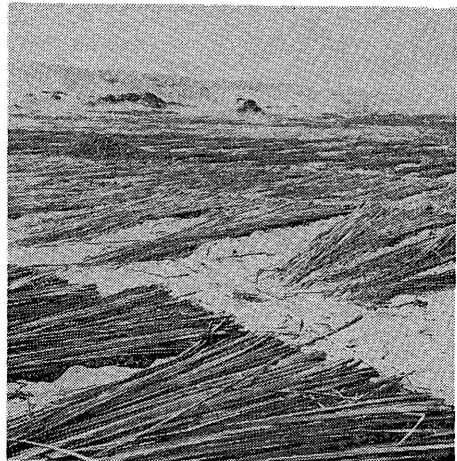


写真10 トトラの乾燥



写真11 トトラを等量にわけて広げる

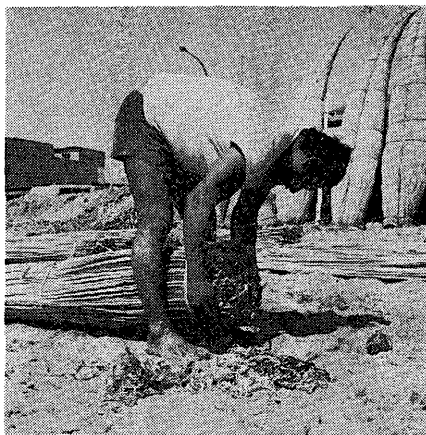


写真12 トトラを束ね、仮締めしておく



写真13 “マードレ”のトトラ束のうえに、“イーホ”をのせる

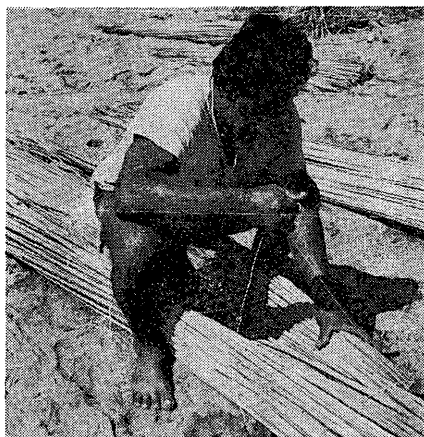


写真14 “マードレ”のトトラ束のなかに、“イーホ”を押しこみ、一体にする



写真15 胴をあらためて締めなおす。両膝で胴をおさえ、手前に糸をひいて、そりをつくる



写真16 2本の胴を一体にする

方向をそろえて、束ねられているので、全体として細長い円錐形となる。次に、同じ要領で短いトトラも束ねて、円錐形のトトラの束をつくる。この長いトトラの束がマードレで、短いものがイーホである。

次に、このマードレとイーホをつかって、1本のバストーンをつくる。マードレの束の上に、イーホのトトラの束を方向をそろえて乗せる(写真13)。イーホの位置は、その後端部がマードレの後端部から約1mのところにある。マードレの仮締めの特トラは後部からはずしてゆき、その部分の特トラの束をゆるめて、イーホをさし入れる。マードレの特トラの束を両側にわけて、そこにイーホの特トラ束を押しこみ、イーホを包みこむように、マードレの特トラをかきよせる(写真14)。

この状態で、仮締めの特トラにかえて、太い糸で後端部からトトラの束を締めあげてゆく。1本の糸で、らせん状に強く締めてゆく。オタバロ族の場合は、この段階で芯束から少しずつトトラをひきだす作業をおこなうが、ここではそれはおこなわない。したがって、イーホの特トラ束をマードレの特トラで総ておおってしまうと、このイーホの後端部とマードレの間は空洞になってしまう。そのため、この部分はイーホがほぼ半分くらいかくれる程度に、マードレの特トラをひきよせ、この間にできたくぼみは先にみたカヘタの一部とする。

糸でバストーンを全部締めあげたところで、ふたたび後端部から強く巻きなおしてゆく。とくに先端部は両足で胴を押さえ、強く手前に糸をひきながら巻いてゆく(写真15)。この作業によって、これまでの円柱状の特トラ束が、弧を描いたようなそりをもつ。最後に、同じ要領でつくられた、もう一本の胴(バストーン)と一体にする。後部のくぼんでいる部分の一端をあわせ、糸で巻いて一体にする(写真16)。この作業でも、先端部では体重をかけて、できるだけ船首にあたる部分がそりをもつようにする。作業は、完成まで、2人で3~4時間である。

(3) 利 用 法

先にみたように、ワンチャコ村の葦舟は、オタバロ族のそれよりはるかに大きいため、二人は充分に乗ることも可能であるとおもわれるが、わたしがみたかぎりではいづれも一人で乗っていた。カヘタのすぐ前の部分に、船体をまたいで腰をおろし、両足は普通前方に伸した状態ですわる。オタバロ族の葦舟にくらべれば、座る部分は幅も広く、しかも双胴になっているため、安定性もかなり良い。

船をあやつる道具はカイである。このカイはカーニャ(caña)またはカーニャ・デ・グァヤキル(caña de guayaquil)ともよばれるように材質は竹(caña)で、それをふたつに割ったもののひとつがつかわれる。幅が約10cm、長さが約2mのもので、

とくに細工はしていない。ワンチャコ村周辺で竹の自生しているところはなく、このかいはカーニャ・デ・グァヤキルとよばれていることでも明らかのようにエクアドルのグァヤキルからのものであるといわれる。

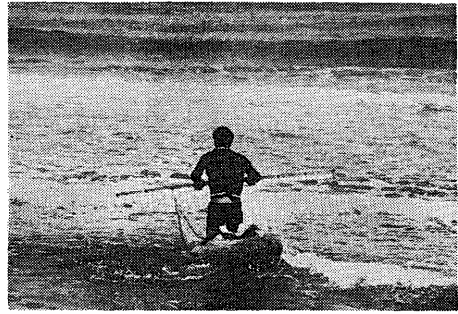


写真17 ワンチャコ村の葦舟の操船方法

船体に腰をおろし、両手でカイをもつて、すわったまま、これを左右にあやつってこぐ。波に対しては、船体を直角にし、両膝をついて船の上で立ちあがって、かいをあやつって沖にでる(写真17)。ある程度、沖合にできれば、潮の動きが利用できるのもので、それを利用して進む。沖から岸にむかうときは、波の動きを利用し、波乗りの要領で進むため、カイは補助手段となる。用途は、もっぱら漁撈活動のためにある。

なお、ワンチャコ村でも、使用後の葦舟は、海からひき上げ、背負って運び、海岸に立てて保管される(写真9参照)。使用可能な期間は、トトラの侵水や破損などのために1~2カ月である。

4) ティティカカ湖の葦舟(標本番号 12644, 12645, 12646)

(1) 形態

ティティカカ湖では、葦舟はわたしの調査したペルー領の浮島でワルサ(hualsa)、アイマラ族の住むボリア領のスリキ島でヤンプー(llampu)とよばれていた。ともに、それぞれ大きさの異なる三つの葦舟があるとされるが、アイマラ族について観察し得たのは、そのうちのひとつだけであった。ウロ族の三つの葦舟の形態は基本的に同一型式に所属する。そして、ウロ族とアイマラ族の両者とも、船首の形態的なちがいを除けば同一型式といえる。すなわち、アイマラ族の葦舟は両船端部がそり上っているのに対し、ウロ族のそれは、ほとんどそりがないのである(写真18および写真1)。

ウロ族の三つの大きさの異なる葦舟は、小さいものから、ヒスカ・ワルサ(jiskka hualsa)、ナサニ・ワルサ(nasani hualsa)、ハチャ・ナサニ・ワルサ(jacha nasani hualsa)とよばれる。それぞれ「小さい葦舟」、「鼻のある葦舟」、「大きい鼻のある葦舟」の意味である。細部についての大きさは後述することにして、ここでは全長だけを示しておく、それぞれ 310 cm, 360 cm, 410 cm である。これらはいずれも、二つの太い胴(chara)、その上に舷側(pilla)がつけられている。また、大きい葦舟



写真18 アイマラ族の葦舟。船首と船尾がそり上っているのが特徴的である

は帆柱をたて、そこにトトラでつくった帆 (kaisana) をかけるのが一般的である。

いっぽう、アイマラ族の三つの葦舟は、チョカ・カトゥーニャ・ヤンプー (chokha katuña llampu), コタ・サラニャ・ヤンプー (kota saraña llampu), カルハ・ヤンプー (carja llampu) とよばれる。それぞれ、「鳥をとる葦舟」, 「湖を歩きまわる葦舟」, そして「運搬用葦舟」の意味である。このうち、カルハ・ヤンプーとよばれる葦舟は、現在ほとんど作っていないといわれている。これらの大きさは、聞きとりによれば、全長がそれぞれ、約 2 m, 4 m, 5 m である。構造的には、これら三つとも同じとされることから、以下ではウロ族の葦舟について記述し、アイマラ族のそれについては必要に応じて触れるにとどめる。

これらの葦舟の船体の胴は、外部からは2本のトトラ束から構成されているようにみえるが、実際は2本の胴のあいだに、芯束に相当するもう1本の細いトトラの束 (chuima) があり、計3本のトトラ束できている。ウロ族の大きさの異なる三つの葦舟のうち、ヒスカ・ワルサは名称からもうかがえるように、小さいだけでなく、他の二つのものとくらべて若干形態もちがう。それは、ナサ (nasa) とよばれる船首と船尾である。

三つの葦舟はいずれも、この部分が2本の舷側、2本の胴および中心部の芯束の集まるところになっている。ナサニ・ワルサおよびハチャ・ナサニ・ワルサでは、両船端部が内側にすこし折るかえされた形となっているが、ヒスカ・ワルサではナサが小さくて、ほとんど目立たない。これは、製作法のちがいに起因するので、この点については、次にくわしく述べることにしよう。

(2) 製作方法

〈採集〉 トトラの刈りとりには、簡単な道具がつかわれる。長さ2~3mの棒の先端部にナイフをくくりつけた鉤状のもので、キニーニャ (kiniña) とよばれるものである。ティティカカ湖畔では、トトラは水深2m前後の湖畔の浅瀬に豊富に自生しているので、これをできるだけ根元にちかい部分から切りとるための道具である。湖水はきわめて透明なので、葦舟の上からトトラの根元を見ながらキニーニャをつかかって切りとる。切りとられ、浮き上ってきたトトラは、そのままの状態、1~2週間放置される。急激な乾燥は茎のひび割れやまがりを生じさせるため、この状態で適度の乾燥を待つのである。なお、葦舟の材料となるトトラは、さきに述べた茎が長く丸いトトラ、すなわちオルコ・トトラでなければならないとされる。

〈乾燥〉 浮島にもち帰られたトトラは、すこしずつ束ねたものを立てて乾燥する(写真19)。オタバロ族の葦舟づくりで述べたように、横にして置いて乾燥するとまがりを生じさせるからである。乾燥期間は季節によって異なるが、普通1~2週間である。といっても、葦舟の材料のトトラは、後述する浮島の家の壁や屋根の材料とは異なり、完全に乾燥したものではない。完全に乾燥したトトラは、作業中に折れやすく、またひび割れもおこしやすい。このようなトトラを葦舟の材料、とくに船体部分につかうと、破損した部分から浸水して、浮力を損うからである。したがって、葦舟づくりの作業中でも、乾燥しすぎていると思われる部分には打ち水をするなど、この点にはとくに注意が払われる。

〈準備〉 船づくりをする場所は、完成後運ぶのに都合が良いように、浮島の端の水辺ちかくの場所が選ばれる。そこに、葦舟づくりに必要なトトラが総て運びこまれる。葦舟づくりの前後に、儀礼的な行事は一切なく、過去においてもなかった、といわれる。葦舟づくりをする特別な季節というものはなく、葦舟製作は必要に応じておこなわれる日常的な作業なのである。

葦舟づくりは、かなり力を要する作業なので成人男子の仕事になっている。しかし、葦舟製作に必要な縄づくりは、一般に女性や子供の仕事になっており、葦舟製作の前に必要量の縄が総て作られる。これまでみてきたエクアドル北部高地やペルー北海岸の葦舟製作では、ありあわせの縄や糸で間にあわせたり、購入したものをつかっていたが、ここでは葦舟製作のたびに、新しい縄がつくられる。

この縄の材料は、チジワ (chilliwa) とよばれるイネ科の植物 (*Festuca dolichophylla*) である。チジワは、もちろん浮島にはなく、アンデスの高原地帯に自生している野生植物なので、採集してくるか、購入したものをつかう。このチジワは、草丈が50~

70 cm に達し、その茎の太さが 1 mm 程度と細長いものである。これを水につけて濡らし、さらにレケーニャ (lekkeña) とよばれる木槌でよくたたき、やわらかくしてから編む。

このようにして、やわらかくした数本のチジワの茎を 1 本にしたものを、両手をつかって、よりあわせ、三つ組に編む。この縄は丸組ではなく平組で、この方が葦舟製作、とくに船体の胴を締めるのに都合がよく、カナ (kana) とよばれている。ひとつの葦舟の胴の製作だけで、数十 m の長い縄が 2 本必要とされる。ただし、この縄は途中で結び目があってはならない。

なお、ここで葦舟製作に必要な道具についてふれておくと、上で述べたレケーニャという木槌のほかには、カラバト (carabato) という手鉤だけである (写真20)。アイマラ族も基本的には同じであるが、木槌のかわりに石をつかっていた。

〈胴づくり〉 葦舟をつくろうとする場所に、まずサオを横にして置く。このサオ (ñokeña) は、本来葦舟を操作するためのものであるが、ここでは船体の長さや幅を決めるための物差しとして利用される。このサオの上に、サオとは直角に数本の縄を平行におく。ついで、この縄の上に、サオをはさんで、等量のトトラを平行に置く (写真21)。これが船体を構成する 2 本の胴になる部分である。

トトラ 1 本の長さは 2~3 m になるが、大きい葦舟は、それ以上の長さになる。また、トトラの茎の先端部は細く、根元にちかい部分は太い。したがって、トトラの置き方は一方向にそろえるのではなく、中央部でトトラの先端部がかさなるように、両側から積みかさねてゆく (写真22)。これらのトトラを束ねたとき、太さが等しく、しかも長いトトラの円柱ができるようにする工夫である。

つぎに、下に敷いたトトラの上のちょうど中央に、さらに、ひとかかえほどの太さのトトラの束を積みあげる。このトトラ束と、その下に敷いたトトラを、はじめに置いた縄で、ひとつに束ねて仮締めをする (写真23)。そして、この束からトトラをすこしずつひきだし、また両端部にトトラをさし入れ、このトトラ束の太さを整えてゆく。

分担して作業を進める場合、上記の作業と平行して芯束づくりがおこなわれる。この芯束 (chuima) は、スペイン語で corazon (心臓) と呼ばれているが、中央部が 10 cm あまりの細長い紡錘形をしたトトラの束である (写真24)。芯束の製作方法は基本的に胴づくりと同じであるが、これをトトラをつかって束ねる。

〈船体の製作〉 2 本の太い円柱状のトトラ束と 1 本の細長い紡錘形の芯束、これらを一体にして船体にする。その作業にさきがけて、これらのトトラ束に水をかける

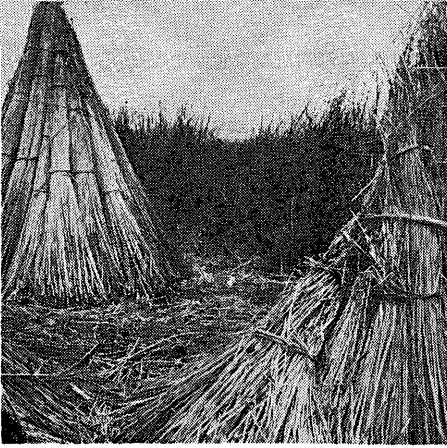


写真19 トトラの乾燥

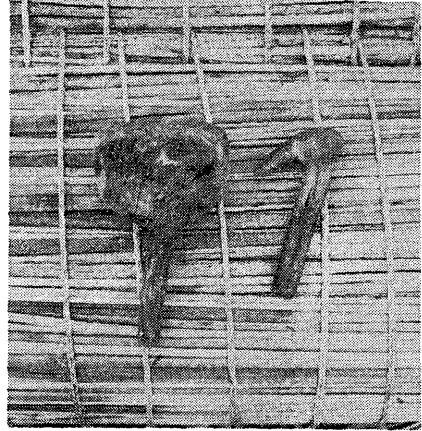


写真20 carabato (右) と lekkeña (左)



写真21 尺棒がわりのサオの両側にトトラを敷く



写真22 トトラを積みかさねる



写真23 仮締めをして、トトラ束の太さを知る



写真24 船体の長さにあわせて芯束をつくる



写真25 縄かけの前に、トトラ束に水をかけて乾燥をふせぐ



写真26 縄どおし



写真27 芯束は両端以外は胴で締められ見えなくなる



写真28 体重をかけ、さらに胴を締め上げる



写真29 胴の先端部からトトラをさし入れ形をととのえる

(写真25)。芯束は軽いので、湖水につけて、濡らす。いずれも乾燥を防ぐためである。トトラが乾燥しすぎると、縄で締めて一体化するときに、折れたり、ひび割れをおこすからである。

この段階で、2本のトトラ束のあいだに置いたサオはとり去り、かわりに芯束をおく。これからは、この芯束が船体の長さを知る目安となる。こうして、すこし間隔をあけて平行に置いた3本のトトラ束の下に、前後に2本、トトラを束ねたものを枕として置く。これでトトラ束をうかし、縄をとおしやすくするのである(写真26)。

縄のとおし方は、芯束と1本の胴がひとつの輪のなかに、はいるように巻く。そのために、普通は一人が2本のトトラ束のあいだにはいり、芯束をまたいで縄をとおしてゆき、これを両側にいる人間が助ける。つぎに、もう1本の縄で、残りの胴と芯束がやはり一つの輪のなかに、はいるように巻く。このように、2本の縄をつかって交互に巻いてゆく。全部、巻きおえたあと、巻きはじめの部分にもどり、2本のトトラ束(胴)の両側から縄をひいて締めあげてゆく。

アイマラ族のトトラ舟製作では、この部分の作業がこれとは若干異なっている。Šolc の報告によると、縄のとおし方は基本的に同じであるが、芯束を巻く縄は、芯束の外側だけでなく、一部は芯束を貫通させているのである [Šolc 1967]。

芯束は、両側からそれぞれ1本の縄でひばられる。胴部のほうは2本とも、それぞれ、同じ1本の縄で外側に引かれるため、3本のトトラ束は芯束を中心にして一体になってゆく。その結果、芯束は両側のトトラ束ではさまれ、両端部を残して、ほとんど見えなくなる(写真27)。

〈船体の整形〉トトラ束の下に置いた枕をとりはずし、今度は船体の上に乗って、さらに強く縄をしめ上げる。また、これを裏がえしにし、同様にして、船体を締める。体重をかけて、強く縄をひくため、これまで円柱状だった胴は扁平になり、全体として、船体は厚い板状になる(写真28)。この状態から芯束のもつ役割がうかがえる。すなわち、芯束がなければワンチャコ村の葦舟のように、船体の2本のトトラ束が接した部分には深い窪みができる。ウロ族やアイマラ族の葦舟の場合、この芯束の存在によって、2本の胴のあいだの窪みはほとんどなくなり、平坦な船底および平底を提供することになる。この点で、ウロ族の葦舟は、オタバロ族やワンチャコ村のものにくらべると、筏より船にちかいものとなる。

しかし、この段階では、まだ船体となる胴の両端部は不ぞろいで、しかもそこからは芯束がとびだしているため、これを船らしく整形する。具体的な作業としては、胴のトトラ束を芯束の長さにあわせると同時に、その形も船らしく流線形にする。この

ために、再度、2本の枕の上に、船体を置き、この上によって体重をかけながら縄をひく。この作業によって、これまで扁平であった船体の両端部がそり上ってくる。また、この両端部から、すこしずつトトラをひきだして、胴のトトラ束を芯束の長さにあわせる（写真29）。胴部から、ひきだしたトトラだけでは充分ではないので、先端部から新しいトトラをさしこんで形をととのえる。この部分も、さきと同じ要領で縄をとおし、ひいてみる。トトラがひきだされた胴の一部は当然細くなっており、また凹凸もできる。ここにも、トトラをさしこんで形をととのえる。

整形が終ると、再度、縄を締めなおしてゆくが、さらに強く締めあげるために、道具がつかわれる。さきに縄づくりでつかわれた木槌と手鉤である。この木槌で、船体を締めている縄の周辺部をたたいて、ゆるみを生じさせ、これに手鉤をとおして強くひく。はじめに縄づくりで、結び目をつくらずに長い縄を作ると述べたのは、このためである。つまり、結び目のある縄では、強く締められた2本の胴のあいだを縄がとおらないので、その結果船体を固く締め上げることができないからである。

船体づくりのしめくくりは、船体の両端の形を整え、船首と船尾をつくることである。この船体の両端部は、これまで見てきたように、2本の胴と芯束の計3本のトトラ束が集合するところとなっている。したがって、この部分が葦舟のもっとも重要なところになっていて、作業もきわめて慎重におこなわれる。ただし、これまでの作業では、大きさの異なる三つのタイプの葦舟の製作法はまったく同じであったが、この船首（尾）づくりと、この後につづく舷側づくりでは、ヒスカ・ワルサとよばれる、もっとも小さい葦舟だけが、すこし異なっている。

ヒスカ・ワルサの船体を構成する2本のトトラ束は、他の葦舟のものと同く比べると細く、その両端部は数本のトトラできているような細いものである。これを、束ねて、垂直にたち上らせている。ところが、残りの二つの葦舟、ナサニ・ワルサとハチャ・ナサニ・ワルサでは、2本の胴の両端部が太く、これをそり上らせるためには、すこし工夫が必要となる。すなわち、この部分のトトラを折りまげる際に、トトラの茎の内側をナイフでそぎ落して、まげやすくした上で、縄で強く締めて、そりをつくる。

アイマラ族の葦舟は、この船首（尾）が、長く、しかもそりが大きい。この点について、Šolc の報告では、その製作法はあきらかではないが、おそらく、ここでみたナサニ・ワルサやハチャ・ナサニ・ワルサの胴の両端部からのトトラのひき出しを多くし、同様の方法でそりがつけられているものと想像される。

〈舷側のすえつけ〉 この作業で、ヒスカ・ワルサと他の葦舟との大きなちがいは、



写真30 舷側づくり (ヒスカ・ワルサ)



写真31 舷側づくり (ナサニ・ワルサ)

前者の舷側は船体の一部として作られるのに対し、後者のそれは、別個に舷側となるトトラ束をつくり、これをすえつけるのである。まず、ヒスカ・ワルサの方からみてゆこう。船首にすこし残されている細い垂直のトトラ束の両側に、それぞれ数本のトトラの茎の根元を縄でむすびつける。この縄は、船体を締めてきたものである。つぎに、トトラの茎をすべて船体の側に折り曲げ、縄で、折りまげたトトラが一つの輪のなかにはいるように、船端部から船体を巻いている縄にとおしながら、この縄とトトラで舷側のフレームをつくる。そして、このフレームのなかに、トトラをつめて舷側をつくるのである(写真30)。

これに対して、ナサニ・ワルサやハチャ・ナサニ・ワルサでは、さきの芯束づくりのように、船体の大きさにあわせて、トトラで仮締めしたトトラ束をつくる。これを船体の上に乗せたうえで、やはり船端部から、船体を締めている縄にとおしながら舷側のトトラ束をすえつけてゆく。この作業と並行して、芯束の形を整えて舷側をつくるのである(写真31)。

(3) 利 用 法

ウロ族の大きさの異なる三つのトトラ舟は、それぞれ用途が異なっているが、それ

について述べるまえに、葦舟全体として、その利用法で注意しなければならない点についてふれておこう。さきの製作法のところでみたように、ウロ族の葦舟は、船首と船尾が構造的にもっとも重要な部分となっており、この部分には絶対に足や腰をかけてはいけなるとされる。この部分を損傷すると、船体を構成する3本のトトラ束および舷側が分解してしまうからである。そのため、ウロ族の葦舟の耐用期間は、この部分のとり扱い如何によって、大きく異なってくるといわれる。すなわち、この船首(尾)を慎重に扱えば、その利用は約1年は可能であるが、そうでない場合は半年もつかえない、とされる。なお、アイマラ族の葦舟も含めて、ティティカカ湖では、使用後ひきあげて乾燥することはない。したがって、自然な状態でも、この葦舟は水をすい、次第に浮力を失ってくる。

さて、利用方法について具体的にみてゆこう。もっとも小さい葦舟、ヒスカ・ワルサは狩猟用で、狩猟の対象は鳥である。ティティカカ湖は水鳥の多いことでよく知られているが、とくに多いのは湖畔のトトラの茂みである。狩猟の方法は、オンダ(honda)やボーラ(bola)などの投石具が使われるとされるが [LA BARRE 1963; Tschopik 1963], 現在、この方法はほとんど消滅しているようである。

観察した方法は、次のようなものである。トトラの茂み近くに水鳥を発見したとき、ヒスカ・ワルサで茂みの反対側から接近する。舟をあやつる道具はサオである。トトラの生えているあたりは比較的浅いのでサオをついて進み、できるだけ水鳥に近づく。水鳥が逃げそうになると、サオを強くついて、鳥にむかって突進する。水鳥は急には飛び上れず、トトラの茂みに逃げこむ。茂みのなかでは、密生するトトラの茎が邪魔になって、それほど遠くへは逃げられない。その逃げこんだと思われるところに、葦舟を乗りいれ、サオで強くそのあたりをたたいて、鳥をとる。このほか、このヒスカ・ワルサをつかって鳥の巣を探し、卵を手に入れる。いずれにしても、狩猟は機敏な動きが要求され、またそれをつかう場所がトトラの茂みのなかなので、小さな舟とサオでの操船がもっとも目的にかなっているものとおもわれる。

中間の大きさの葦舟、ナサニ・ワルサの用途は漁撈用である。このティティカカ湖の漁撈法については、多くの報告があるので [Tschopik 1963 ほか], ここでは漁撈活動における葦舟の利用にかぎって報告する。ナサニ・ワルサは2~3人は充分乗れるが、さし網漁も追い込み漁も一人で葦舟に乗る。舟をあやつる道具はサオとカイである。浮島近くでは船のなかで立ち上ってサオをついて進むが、遠く離れると水深が深くサオを使用することはできない。すわった状態で、カイをあやつって進む。とくにさし網漁の場合は、片手でカイをあやつりながら、もう一方の手で網を操作する

ことができるからである。追い込み漁の場合は、二隻の葦舟をつかう。舟にはそれぞれ一人ずつ乗って、平行に走らせ、魚の群を探す。魚の群がみつければ、魚の進む前方にまわりこんで網をおろし、二隻の葦舟は離れて、網をひろげる。ついで、サオで湖面をたたきながら、魚を網のほうに追いやり、網をしぼる。これは、さし網と異なり、狩猟と同様、かなり機敏な動きが要求され、また深いところでは網が底につかないため浅瀬での漁法となっていて、もっぱらサオが利用される。

もっとも大きいハチャ・ナサニ・ワルサは、遠距離の旅行用である。具体的には、湖岸のチュクイト (Chucuito) の市などに、でかけるときなどにつかう。操船の道具は、サオ、カイ、帆がある。サオは浮島から離れるとき、また接岸するときにつかうくらいである。カイは風がなくて帆だけでは進まないときの補助手段としての役割のほか、舵としての役割が大きい。帆は、最近布製のものが多くなっているが、ティティカカ湖本来のものとしては、さきに述べたトトラの一枚の帆のものであろう。

帆をはるマストにあたる柱はいずれも2本で、先端でむすばれVの逆の字の形になっている。マストは船首から1/3くらいのところの舷側の両側に、穴があけられ、そこに立ててある。マストを支えるのは船首と船尾から張られた縄である。マストの先端部には、さきに葦舟づくりでみたカラバトとよばれる木製の手鉤がついていて、これに縄をとおして吊り下げている。帆の下端部は一方だけ固定して、もう一方の端の縄は、船をあやつる男が握り、帆を操作する (写真32)。

以上、みてきたように、ウロ族の三つの葦舟は、それぞれ用途が異なっているが、これらの葦舟が、ここで述べた用途以外に利用されないというわけではない。後に述

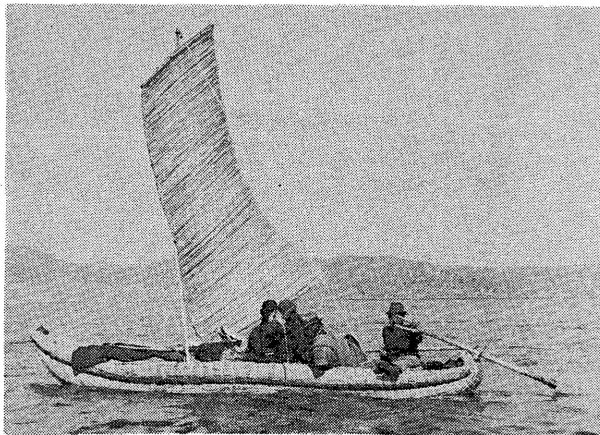


写真32 帆つきのトトラ舟 (ハチャ・ナサニ・ワルサ)

べるように、ウロ族は浮島に住んでおり、そこでは、どこへ行くにも葦舟が欠かせない。したがって、狩猟用とされるヒスカ・ワルサや漁撈用のナサニ・ワルサがしばしば浮島間の交通に利用される。

なお、アイマラ族の葦舟、チョッカ・カトゥーニャ・ヤンプー、コタ・サラニーャ・ヤンプー、カルハ・ヤンプーも、ウロ族の場合と同様に、それぞれ狩猟用、旅行用、運搬用と、大きさによって用途が異なっていたようであるが、その利用法など、詳細は明らかではない。

5) 葦舟の比較考察

これまで報告してきたような植物の茎を束ねてつくった、いわゆる葦舟は、材料をトトラに限らなければ、南アメリカだけではなく、北アメリカやオセアニア、アフリカなどでも広く利用されていたことが知られている [HORNELL 1970; JOHNSTONE 1980 ほか]。南アメリカでは、その製作利用地域はアンデス地域に限定されていたが、かつては、さきに報告した地域のほかに、コロンビア、アルゼンチン、チリなどのアンデス山中の湖沼や太平洋岸地域でも、葦舟が利用されていた [EDWARDS 1965; PEREZ 1971]。とくに、ペルーからチリにかけての海岸地帯では広く葦舟が利用されていたことが知られている。

葦舟について、このアンデス地域と他の地域を比較すると、アンデス地域にはもっとも多様な形態の葦舟がみられ、しかもそのなかにはティティカカ湖の葦舟のようにきわめて技術的にすぐれたものがみられることが指摘されている [HORNELL 1970]。それでは、何故、アンデス地域で、このような葦舟の利用法の発達がみられたのか。また、これまで重要な役割をはたしてきたはずの葦舟が、何故、現在急速に消滅の傾向にあるのか。葦舟の報告のまとめとして、これらの問題について若干の考察を加えておきたい。

はじめに、アンデス地域で、いつ頃から、どのような葦舟が利用されていたのか、という問題について概観しておこう。現在知られている葦舟利用のもっとも古い資料は、最近チリの海岸地帯で出土した葦舟の模型である。これは約2,000年前のものと推定されているが、材料が reed で、これを束ねたものとなっており、その構造は現在ペルー北海岸でつかわれている葦舟に類似している [JOHNSTONE 1980: 14]。

ペルーの海岸地帯では、プレ・インカ期の葦舟利用の情報がモチーカ (Mochica) 文化やチムー (Chimú) 文化の土器のモチーフから得ることができる²⁾。写真33はモ

2) モチーカ文化、チムー文化はともにペルーの北海岸地域で栄えた文化で、その時代は前者が A. D. 100-800、後者は A. D. 1,100-1,470 年頃と推定されている [ルンブレラス 1977]。

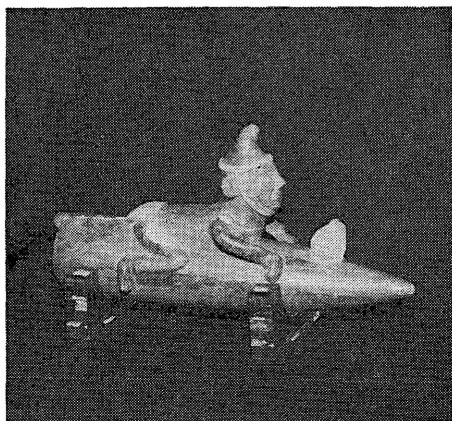


写真33 一人乗りの葦舟（モチーカ文化）
ペルー，天野博物館 (Museo Amano)
所蔵



写真34 二人乗りの葦舟（チムー文化）
ペルー，国立人類学考古学博物館
(Museo Nacional de Antropología y
Arqueología) 所蔵



写真35 舷側のある葦舟（チムー文化）
ペルー，国立人類学考古学博物館 (Museo
Nacional de Antropología y Arqueolo-
gía) 所蔵

チーカ文化の土器で、先端が細くなった1本の胴の上に、一人の男が乗っている姿をあらわしたものである。これは、エクアドル高地で現在みられる葦舟にきわめて似たタイプのものである。写真34はチムー文化のもので、細くなった先端がそり上り、後端部が切れ落ちた形をしていて、その形態はペルー北海岸の葦舟にちかい。写真35もモチーカ文化のもので、太い胴の両側に、舷側とみられるものがあり、船首にはペルーの北海岸でつかわれるのと同じようなカイをもった人物がみえる。この葦舟は、アイマラ族の葦舟とペルー北海岸の葦舟との中間型とみることができよう。

これらのモチーフから、当時ペルーの海岸地帯には、いくつかの形態の葦舟がみられたことがわかる。これらの葦舟の用途についても、やはりモチーフから知ることができる。図2はやはりモチーカ文化の土器表面に描かれた絵であるが、これから葦舟をつかっての漁撈活動の様子がうかがえる。なお、アンデス高地部では、葦舟についての考古学的な資料は得られないが、すくなくともティティカカ湖などでは、さきに述べたアコスタをはじめとするクロニスタの記録などから先スペイン期に葦舟が利用されていたことがあきらかである。

さて、表2は前節で述べたことを簡単にまとめたものであるが、他の地域の葦舟をも含めて、その構造、用途、環境などについて比較検討してみることにしよう。

まず、葦舟の分布についてみてゆこう。現在、すでに消滅している地域も含むならば、葦舟はエクアドルからチリ、アルゼンチンまでのアンデスの広い地域で製作利用されていた。しかも、その利用地域はほとんどが、アンデス高地部か太平洋岸の海岸

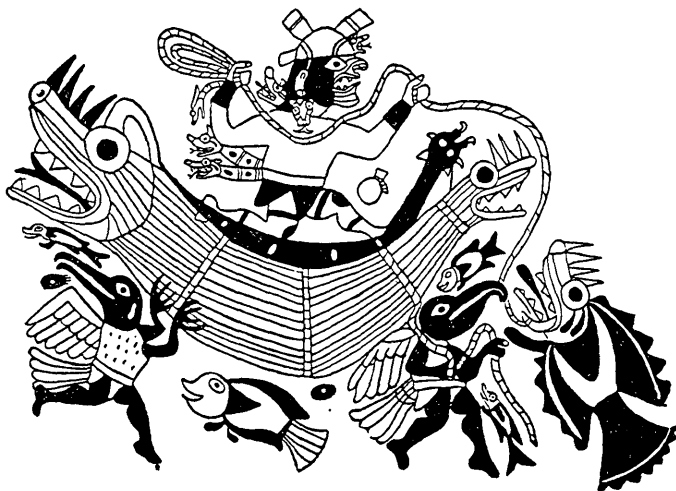


図2 モチーカ時代の漁撈光景 [Joyce 1912]

表2 トトラ舟の比較

地域 (部族)	名称	構造	大きさ (cm)	使用 場所	主要用途	製作 道具	備考 (標本番号)
エクアドル高地 (オタバロ族)	caballito de totora	単 胴	最大長 315	湖	漁 撈 トトラ刈り	ナイフ	12962
			// 幅 38				12963
			// 高 23				
ペルー北海岸	caballito de totora	双 胴	最大長 415 // 幅 60 // 高 28	海	漁 撈	ナイフ	12921 12922
ペルー領ティ ティカカ湖 (ウロ族)	jiskka hualsa	双 胴 芯 束 弦 側	最大長 310	湖	狩 猟	ナイフ 木 槌 手 鉤	12646
			// 幅 68				
			// 高 35				
	nasani hualsa	//	最大長 360 // 幅 90 // 高 31	//	漁 撈	//	12645
	jacha nasani hualsa	//	最大長 410 // 幅 100 // 高 56	//	旅 行	//	12644
ボリビア領ティ ティカカ湖 (アイマラ族)	chokha katuña llampu	//		湖	狩 猟	ナイフ 石	
				//	漁 撈	//	
				//	運 搬	//	

地域に限定されている。これは、この地域が、一般に船の材料となる木材の入手の困難なところであることを物語っている。換言するならば、アンデス地域における葦舟利用の発達には、アンデス高地部が森林限界をこえたところであり、海岸地帯がほとんど砂漠地帯となっている生態的背景が指摘できる。同じ南アメリカでも樹木が容易に入手できるアマゾン地域やエクアドルの海岸部では、葦舟利用はみられないのである。

つぎに、葦舟の用途についてみてゆこう。葦舟の主たる用途は、漁撈や狩猟、トトラの採集であって、水上交通、輸送は第二義的である。これが、生業の面からの葦舟利用の発達の背景をうかがわせる。すなわち、南アメリカの太平洋岸地域は、くりかえし述べてきたように、ほとんど砂漠地帯であって、農耕適地はきわめて限られてい

る。したがって、そこでの主要食料資源は海産物で、この海産物を得るために、海岸地帯では、古くから、広く、葦舟の開発がおこなわれたものとかんがえられるのである。

これは、アンデス高地部でも、同様のことがいえる。アンデス高地部は、海岸地帯とは逆に、一般に動物性食料資源の入手が困難な地域である。したがって、葦舟を利用してとれる魚、鳥、鳥の卵などは、それぞれの地域できわめて重要な産物となっている³⁾。また、後に述べるように、これらの湖畔に自生するトトラはきわめて有用な植物であり、この植物を大量に採集するためにも、葦舟が必要となるのである。

それでは、ほぼ同じような用途をもつ葦舟が、地域によって、多様な形態を示しているのは何故であろうか。これは、葦舟の利用される環境のちがいを反映していると思われる。その好例は、ティティカカ湖のウロ族とアイマラ族の葦舟にみることができる。ウロ族の葦舟は船首が短く、またほとんどそりがないが、これは主としてトトラの茂みのなかで使用されるため、長い船首は操船に支障をきたすのである。いっぽう、アイマラ族の大きくそり上った船首は、ときに高波の生じる沖合で利用するのに好都合なのである。

エクアドル高地とペルー北海岸の葦舟の形態および構造のちがいも、利用される環境のちがいから説明できそうである。エクアドル高地の葦舟は構造がきわめて簡単であるが、これは比較的小さな湖で、しかも強い風のあるときは使用しないなどの条件にあわせて作られているものとみられる。ペルー北海岸の葦舟は、そり上った船首、流線形の船体が特徴的であるが、これらは高い波のある海で使用するのに適している。さらに、構造の上でも、ペルー北海岸の葦舟は双胴で、1本の胴のエクアドル高地の葦舟にくらべれば、はるかに安定がよく、海上での長時間の漁撈活動にも耐えうようにつくられているのである。

ところで、南アメリカにおける葦舟は、各地で別個に発明されたのではなく、その起源はひとつで、おそらく海岸地帯から内陸部に伝えられた、とかんがえられている [EDWARDS 1965: 112]。また、さきにみたように、現在アンデス地域にみられる葦舟の諸形態の原型に相当するものが、ほとんど先スペイン期にペルー北海岸地域で利用されていたとみられる。これらのことから、過去から現在にかけてアンデス地域でみいだされた多様な葦舟は、海岸地域のものが伝播後、それぞれの環境に応じてより適したものが開発された結果であると思われる。

3) ペルー中央高地のフニン湖 (Lago Junín) では、葦舟が魚や鳥をとるためだけでなく、食用蛙をとるためにもつかわれる [FARFAN 1949: 133]。

最後に、アンデス各地で急速に葦舟が姿を消しつつある原因についてみておこう。現在、この傾向のもっとも著しいのは、ペルー北部海岸地域で、ペルー南部からチリにかけての海岸地域では、葦舟利用は消滅したものとみられる。この海岸地帯は、早くから原住民文化が消滅し、メスティーソ化が進行したため、より耐久力のある木造船が葦舟にとってかわったのであろう。

このような傾向は、ティティカカ湖でも生じている。アイマラ族では、ウロ族と同様、用途に応じて三つの大きさの異なる葦舟が利用されるというが、現在、よくみられるのは、このうちのひとつ、コタ・サラニャ・ヤンプーという中型のものだけである。実際、アイマラ族の話によっても、カルハ・ヤンプーという大型の葦舟は、もうほとんどつくられないという。このボリビア領ティティカカ湖では、現在木造の帆船が普及しており、おそらくカルハ・ヤンプーはこれにとってかわられたものと思われる。この帆船は、主として漁撈用のものなので、当然漁撈用の葦舟としてつかわれていたコタ・サラニャ・ヤンプーも、この影響を受けて少なくなっている。その背景には、アイマラ族の漁撈の対象とする魚がマスであり、これはインディオの市場より都市部、たとえばボリビアの首都のラパス (La Paz) などで高値で取り引きされるという状況があって、それが葦舟の利用方法にも大きな変化を生じさせたのであろう。

いっぽう、おなじティティカカ湖に居住しながら、ウロ族の場合、葦舟の利用には、それほど変化がみられない。これも、ウロ族の生活環境や社会的状況にその原因が求められよう。ウロ族の居住するのは浮島であり、どこへ行くにも、葦舟が不可欠なものとなっている。また、その生業は、葦舟を利用しておこなう狩猟と漁撈である。その狩猟は、湖畔に自生するトトラの茂みでおこなわれ、漁撈活動もトトラの生える浅瀬にみられる小魚を対象としており、アイマラ族のようにティティカカ湖の沖にまで出ておこなうものとは異なる。しかも、湖岸には農耕をおこなうアイマラ族が居住しており、彼らにとってはウロ族の供給する魚が貴重な蛋白源となっており、いっぽうウロ族にとっては交換によって得られる農産物が不可欠なのである。

したがって、トトラに全面的に依存した生活をおくっているウロ族をのぞけば、他の地域では、現在の傾向からみて、葦舟は近い将来、姿を消す可能性はきわめてたかい、とかんがえられる。

2. エステーラとバスケット

1) エステーラ

トトラの茎を編んで作られたアンペラや糸や縄でとじたマット状のものは、アンデ

ス地域では一般にスペイン語でエステーラ (estera) の名前で知られている。このエステーラは、トトラだけでなく、ガマやアシでもつくられるが、これまでに、わたしが直接製作方法を観察し、収集できたものは、エクアドルのサン・パブロ湖とティティカカ湖のもので、ともにトトラを材料とするものであった。

Heiser によると、ペルーでは、このエステーラに二つのタイプがあるとされる [HEISER 1979: 226]。アジロに編んだエステーラ (woven estera) と縄などでとじたエステーラ (twined estera) である。わたしが収集できたエステーラのうちで、サン・パブロ湖のものが woven estera であり、ティティカカ湖のウロ族の家の壁や屋根が twined estera の例にあたとみられる。したがって、以下に、それぞれについて、製作方法や利用方法をみることにしよう。

(1) サン・パブロ湖のエステーラ (標本番号 13038, 13039)

さきに述べたように、エクアドルのサン・パブロ湖やヤウアルコチャ湖湖畔に居住するオタパロ族は、農業のかたわら、トトラのエステーラ製作をおこなって、生計をたてている。このエステーラには、大きさや形にほとんど変化はなく、いずれも約 1.8×1.2 m の長方形のものである。この製作は、男の仕事であり、屋内でおこなわれる。

製作方法は、まず刈りとってきたトトラを数日間平坦地に寝かせ、天日で半乾燥状態にする。これを土間で、ほぼ同じ長さにそろえたトトラの茎を、1本おきに逆方向にならべ、この両端を柱などでおさえる。つぎに、手にもった1本のトトラを土間にならべたトトラとは直角に、1本ずつ、くぐらせながら、とおしてゆく。この作業をくりかえして、トトラをアジロに編んでゆく。同時に、トトラとトトラが交叉する部分を、こぶし大の表面がなめらかな石をつかって、よくたたき (写真36)。この作業によって、トトラの丸い茎は扁平になり、編目は目のつんだものとなる。トトラを半乾燥状態にと



写真36 アジロの編み目を石でたたき、目のつんだものとする

どめておくのは、この作業のためなのである。編み上げたところで、このエステーラの端の部分から出ている茎は、すべて折るかえされ、それをエステーラの編み目につきさして、端をそろえる。

利用の方法は、日本におけるゴザなどと同じように、土間に敷いてつかうほか、小屋の壁としても利用される。普通は、キト市やオタパロ市に運ばれ、そこで売られる。

なお、わたしは、ペルーでは、このタイプのトトラのエステーラを見る機会を得ていないが、沿岸地帯では広く、このエステーラが製作されるという情報を得ているほか、そこではアシである *carrizo* (*Phragmites* sp.) の茎でもエステーラはつくられ、家の壁として利用されている。

(2) ウロ族の家 (標本番号 12721)

ウロ族の居住する家は、柱をのぞけば、すべてトトラでできている。つまり、家の屋根、壁、入口の材料がトトラである。この家の形態、大きさは、浮島でみたかぎりでは、ほぼ同じである。すなわち、矩形のプランをもち、周囲の柱にむしろ状の壁をめぐらし、2枚のすだれ状のトトラのエステーラを切妻屋根としている。入口は、普通、壁のエステーラ的一端をひらき戸のようにしている。大きさは、入口のある横側の一辺が約 1.8 m、側壁のある、もう一辺が約 2.5 m、高さは棟木のあるもっとも高いところで約 2 m である。

製作方法は、まず壁と屋根用のエステーラをつくり、つぎに柱をたてて、これにチジワの縄で、屋根や壁をとりつける。この屋根と壁になるエステーラは製作法がかなり異なる。まず、壁用のエステーラづくりから、みてゆくことにしよう。

壁用のエステーラ製作も、葦舟の場合と同じように、まず縄づくりから始める。ただし、この縄の材料はやはりチジワであるが、葦舟づくりにつかわれたものとは異なり、二つ編の丸組みで *phala* とよばれるものである。この縄づくりは女性の仕事となっているが、壁づくりそのものは男性がおこなう。壁は、一枚の細長いエステーラでできているので、作業にさきかけて葦舟用のサオを、この場合も物差としてつかい、全体の長さを決める。ついで、このサオを壁の幅にあわせて2本つきたて、さらにこれらの柱と平行に、壁の長さにあわせて2本のサオをたてる。これらの柱の外側にそれぞれ1本ずつ棒を横に置く。この棒をつかって、約 30 cm 間隔で、平行に縄をはる (写真37)。ちょうどアンデスの織機のうちで、水平機を使用するとき、タテ糸をとおした状態である。

この縄をはった一端に座り、人手が得られる場合は、一人ひとりが、それぞれこれ

らの縄の端に座る。そして、ひと握りほどの太さのトトラの束（約10本）を、4本の縄のうえに、縄とは直角に置く。ついで、このトトラ束を、それぞれがもつ、もう1本の縄で巻き、さきに張った縄の下をくぐらせて強くひく（写真38）。この状態で、あらたにトトラ束を置き、これをさきと同じ要領で縄で巻いて締める。作業をする者は、座ったままの状態で行進しながら、この作業をくりかえす。こうして、さきに張った縄のもう一方の端まで編みあがれば、この縄とそれぞれがもつ、もう1本の縄をむすぶ。最後に、このエステーラの両端から、はみ出しているトトラをナイフで切り落す。

このように壁用のエステーラづくりは、最初に縄をはってしまえば、あとは比較的容易で、その作業は子供でもできる。いっぽう、屋根用のエステーラづくりは、かなりの慎重さと技術が要求される。まず、材料が吟味される。壁用のトトラは、とくに選ばれることはないが、屋根用のトトラは先述したオルコ・トトラだけが材料となる。つまり、茎が太く、長く、しかもまがりのない茎だけがつかわれる。さらに、作業中に、ひび割れているものや折れたものが見つかれば、それも捨てられる。

したがって、屋根用のエステーラづくりは、熟練した男が一人でおこなう。材料選びを終えたのち、十分に乾燥したトトラを、先端部および根元の部分は折りにとって捨て、ほぼ同じ長さ、同じ太さのトトラにそろえる。つぎに、方向をそろえた、これらのトトラの茎を6本ずつ手にとって、茎のほぼ中央に糸のついた針をとおす。6本の

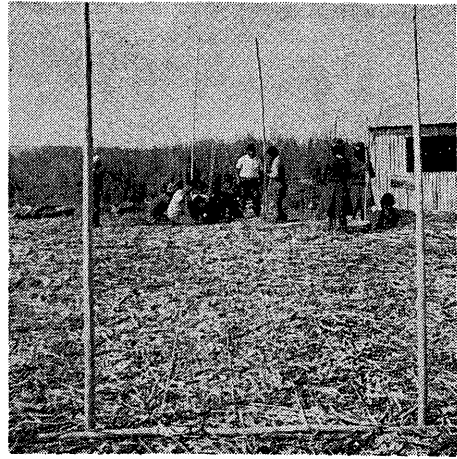


写真37 ウロ族の家の壁づくり。まず平行に縄をはる

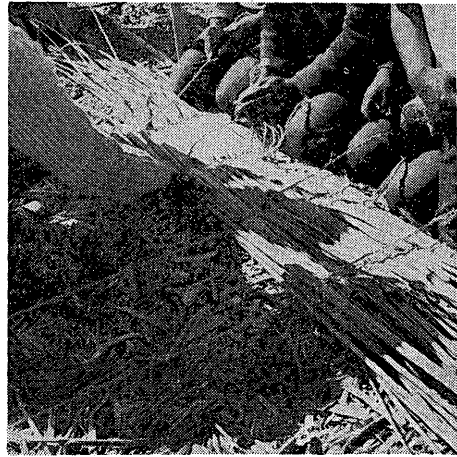


写真38 水平にはった縄の上に、ひと握りほどのトトラ束を置き、これをもう1本の縄でゆわえる

茎を針でつないだ状態で、これらのトトラを、針の部分を中心として、1本おきにトトラの上下を逆にする（写真39）。トトラの茎の根にちかい方は太く、先端の方は細くなっているのので、この作業でトトラをそろえたとき、両端が等しくなるようにする工夫である。つぎに、隣り合ったトトラの茎と茎のあいだに、すき間ができないよう、糸をとおして、つなぐ。この作業をくりかえすことによって、トトラのエステーラは中央にとおされている1本の糸でつながれた状態となる。屋根の長さになれば、この糸のとおっている中央部と両端のあいだにも、針でそれぞれもう1本の糸をとおす。最後に、この両端には、壁用のエステーラづくりで使ったのと同じ縄で双子に編んでとじる（写真40）。できあがったエステーラは、トトラのスダレといった感じのものである。葦舟の帆は、これを使うわけであるが、屋根の場合は、これとまったく同じものを、もう1枚つくる。そして、この2枚のエステーラの縄でとじてある部分を、さらにもう1本の縄でとじて、1枚にする。

以上述べてきたようにして、壁と屋根になるエステーラができあがったところで、これらを組み立てる。そのために、まず柱をたてる。この柱は、コジェ (kollé) とよばれるティティカカ湖畔に自生する灌木で、浮島にはもちろんないので、湖岸で購入してくる。約2mの棟木をささえるためのやや長い3本の柱、壁



写真39 ウロ族の家の屋根づくりトトラの茎の中央部に糸をとおす



写真40 両端を縄で双子にとじる

用の短い数本の柱，そして棟木と柱を補強するための4本の柱がある。いずれも直径10 cm 程度の細いものである。

まず，棟木をささえるための柱をたてる。入口にあたる部分には，50 cm ほどの間隔をあけて，長さの等しい2本の柱を，先端部がくっつくよう，斜めにさしこむ。この2本の柱から約2 m のところに，もう1本のやや長い柱を，入口の2本の柱と同じ高さになるよう，まっすぐ立てる。この柱の先端部と，さきにたてた2本の柱の先端部に棟木の両端を縄でくくりつける。また，これらの柱を中心に，矩形に，短い柱をほぼ等間隔にたてる。この柱は，写真41にみられるように横木をあて，チジワの縄でむすぶ。なお，これらの柱の位置を決めるためには，やはり葦舟のサオがつかわれるが，細部については短く折ったトトラが物差としてつかわれる。

壁用のエステーラのとりつけは，入口右側の柱に，エステーラ的一端を縄でむすんでから，さきにたてた柱の周囲にエステーラをめぐる。矩形にたてられた柱の周囲を一巡したエステーラを入口のもう1本の柱，つまり左側の柱に縄でむすぶ。つまり，側壁となるエステーラは途中の柱でとめることはなく，入口の2本の柱だけでとめられているのである。なお，側壁用のエステーラは入口の左側の柱のところにその端がきているわけではなく，約1 m ほど残されており，これがひらき戸のように，入口としてつかわれる。屋根のとりつけは，きわめて簡単である。2本の短い棒の先端部を縄でむすんだものをふたつ作り，これを写真42のように棟木の前後にのせる。これが，屋根をささえるための垂木となる。この上に，屋根用のエステーラをかぶせる。2枚のエステーラがつなぎ合わされている部分が棟木のところにくるように置く。このエステーラは，棟木より，前後約1 m ほど長く，この部分は中央がとじられていないため，両側をかさねて，前後にたらす。これで，この家の前後の壁のうえの部分がとじられる。最後に，この屋根の上，両側に縄をわたし，縄の両端は壁をとじている縄のひとつにむすびつけておく(写真43)。風で吹きとばされないための工夫である。

この屋根は天気が良くなると茎が乾燥してスキ間ができるが，雨で濡れると茎が膨張してスキ間はなくなり，雨漏りがしない，といわれる。そのために，屋根の材料となるトトラは慎重に選ばれ，しかも1本おきに上下が逆にされるなどの工夫が加えられている。しかし，それでも充分ではないらしく，また寒さを防ぐためもあって，この屋根はもう一枚かさねられるのが普通である。壁は，トトラを何本も束ねて数 cm の厚さがあり，しかもさきにみたように，特殊な編み方がほどこされていて，アジロや双子編みのようなスキ間はまったくない。これも，標高3,800 m あまりのティティカカ湖上での寒さを防ぐための工夫である。

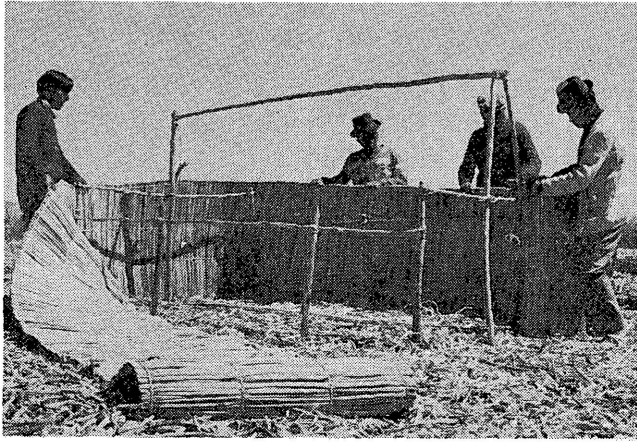


写真41 ウロ族の家づくり。柱の周囲に壁をめぐるす

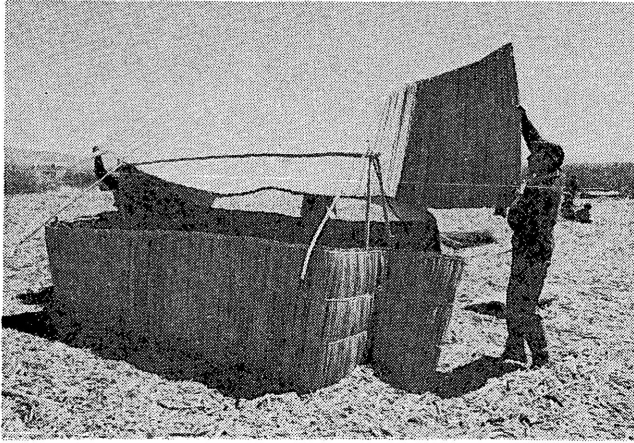


写真42 棟木の上に垂木をのせたあと、屋根をかぶせる

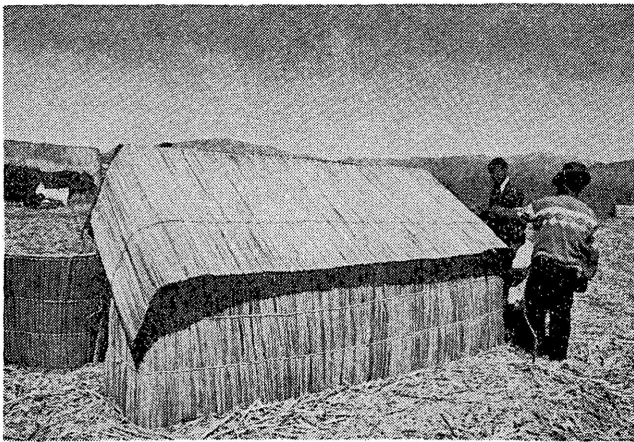


写真43 屋根の上におした縄で屋根をおさえる

ところで、さきに浮島でみられる家はすべて、ほぼ同じ形態、大きさであると述べたが、これは材料のトトラの性質に起因している。というのは、浮島という特殊な環境に住むウロ族にとって、一般に建築材料とされる木や土はたいへん入手しにくいものであり、その家の構造はトトラを最大限に利用したものとなっている。しかも、トトラの茎の長さはせいぜい 2~3 m であり、それを、ここでみたような屋根の製作法をとると、利用できる部分はさらにかぎられてくるからである。

この家のなかで、屋根は直射日光にさらされ、雨にもうたれるため、せいぜい 1 年で、傷みが生じてくるが、その場合、屋根全部をとりかえるのではなく、部分的に修復する。なお、これらの家の具体的な利用方法については、浮島の項で述べることにしよう。

(3) エステーラの分布

前節でみてきたように、ティティカカ湖のウロ族の家の壁と屋根は、異なる製作方法によるものであった。アメリカ大陸原住民のカゴ細工について詳細な調査をおこなった Mason の分類方法にしたがうと、前者は *wrapped twined weaving* によるものであり、後者は *plain twined weaving* によるものである [MASON 1976]。また、エクアドル高地のオタバロ族のエステーラは、いわゆるアジロ編みで、*twilled work* による。したがって、アンデス地域では、トトラを材料とするエステーラの製作方法には、厳密にはすくなくとも三つのタイプがみとめられる。

さて、さきに報告した地域以外でのエステーラの分布について概観し、アンデス地域におけるエステーラの特徴について検討しておこう。ただし、これまでアンデス地域におけるエステーラの報告はきわめて限られ、しかも製作法までくわしく記述した報告は皆無といってよい状態にあるため、上に述べた三種類のエステーラそれぞれの分布について述べることはできない。したがって、ここでは、便宜的にさきの Heiser の分類法にしたがって、ウロ族の家の屋根および壁につかわれるエステーラを *twined estera* とし、オタバロ族のエステーラを *woven estera* として、それぞれの分布についてみてゆくことにしたい。

twined estera は、ティティカカ湖畔の陸地に住むウロ族の家やアイマラ族の葦舟の帆にみられる [LA BARRE 1963; TSCHOPIK 1963]。Heiser は *twined estera* の例として、ペルーのクスコ地方でみられる貯蔵用の入れ物、タッケ (*tacke*) を報告している。また、ペルーの海岸地帯では、インカ期のミイラの包みとして、トトラの *twined estera* が利用されていた [TOWLE 1952: 232-233]。この海岸地帯では、現在ガマを材料として、*twined estera* がつくられ、小屋の壁にする例がみられる。

woven estera は、エクアドルのサン・パブロ湖のほか、ヤウアル・コチャ湖でも大量に製作販売されている。また、ペルーの海岸地帯では、トトラのほか、アシで woven estera がつくられている。しかし、このタイプのエステーラは、すくなくとも、これまで、わたしが観察したかぎりにおいては、ティティカカ湖畔を含むペルー南部高地ではみられない。Heiser も、クスコやアレキッパなどのペルー南部地域では、エステーラそのものがみられない、と報告している [HEISER 1979: 228]。

こうしてみると、ペルーからボリビアにかけての中央アンデス高地部では、エステーラの製作利用の例は決して多くはないようである。つまり、ウロ族にみられるトトラを家の屋根や壁のエステーラとして利用する方法は、中央アンデス高地部では、むしろ例外的な存在であるように思われる。このアンデス高地部では、一般に家の壁はアドベでできており、屋根は、イチュ (*ichu*, *Festuca* sp., *Stipa* sp.) でふかれ、敷物はアルパカや羊の毛皮、および、これらの獣毛の織物がつかわれている。これに対し、さきに指摘したように、湖上で生活するウロ族にとっては、これらの材料が入手しにくいものであり、それゆえにトトラのエステーラとしての利用法が発達したとかがえられる。

中央アンデス高地とはほぼ同じ自然環境下にあるエクアドル高地でのトトラのエステーラとしての積極的な利用はどのように理解できるであろうか。これには、以下の理由がかんがえられる。エクアドル高地部は、中央アンデス高地とくらべると、獣毛用の家畜が相対的に少なく、敷物として獣毛はあまり利用されないようである。しかし、インカ期頃には、このエクアドル高地ではリャマやアルパカがかなり飼われていたことが明らかなので、その当時は現在の中央アンデス南部高地と同様に獣毛やその織物が敷物として利用されていたことが、かんがえられる。このリャマやアルパカの減少は、スペイン人の侵入とともに始まったが、オタバロ族のエステーラ製作は、この頃よりさかんになったのではないか、と思われる。

じつは、オタバロ族が現在製作しているエステーラは、中米のグアテマラやメキシコで製作されるものによく似ていることが指摘されている [SAENS 1933: 64, HEISER 1979: 226]。そして、中央アメリカにおけるエステーラの呼称、ペタテ (*petate*) が16世紀にはペルーでつかわれていたことが知られており、現在でもエクアドルやペルーの一部地域ではエステーラのかわりにペタテと呼ぶところがあるとされる。これらのことから、現在エクアドルやペルーの海岸地帯でみられる woven estera は本来中央アメリカから伝播したものであることが想像されるのである。

2) バスケット

トトラの茎を編んで作られるものとして、最後にバスケットについて検討しておこう。というのは、ペルーの海岸地帯では、先スペイン期の遺跡からトトラを材料としたバスケット類が出土しているとされるが [YACOVLEFF y MUELLE 1932]、今回の収集調査では、わたしが観察することのできたのは一例だけであった。それは、写真44にみられるような大きなカゴ (canasta) で、製作法の詳細は不明であるが、いわゆる巻き上げ細工 (coiled basketry) によるものであった。

いっぽう、ペルーの国立人類学考古学博物館 (Museo Nacional de Antropología y Arqueología) および天野博物館に収蔵されている、海岸地帯で出土したバスケット類約30点について観察してみた結果では、それらは、いずれも一辺が 30 cm 程度の箱型のもの (twilled basketry) で、使用されている植物の茎の直径は 1 mm 程度の細長いものであった。先述したように、トトラの茎は普通 1 cm 以上あり、この点からみても、これらの材料は、すくなくともトトラ、すなわち *S. californicus* とはかんがえられない。ペルーの海岸地帯には、トトラより植物体の小さい、*S. oleyni*, *Juncus* sp., *Cyperus* sp. などが自生しており、茎の太さなどからみて、これらの植物が材料としてつかわれた可能性のほうが、はるかにたかい。

いずれにしても、アンデス地域ではバスケット製作はあまりみられず、とくに高地部では、バスケットそのものが、ほとんどみられない。これは、きわめて多様なバスケットが開発された北米インディアンとくらべると [DRIVER 1961; MASON 1976]、対照的である。アンデス地域にも、トトラ、その他、上で述べたようにバスケットの製作材料になり得る植物が豊富にみられることから、これら両地域におけるバスケット製作技術の発達の大きなちがいは環境以外の要因によるも



写真44 トトラの巻かご

のと思われる。

この問題について、以下に、わたしのかんがえを述べておこう。バスケットの主要な用途が、ものの貯蔵や運搬にあることをかんがえると、アンデス地域では、バスケットにかわるものとして、さきに述べた獣毛で織られた織物がある。そして、アンデス地域は獣毛を材料とする織物の技術がよく発達したところとして知られており [GAYTON 1978: 269-297]、この点では、全体として北米インディアンと対照的な状態にあるようにおもわれる。しかも、アンデス地域では、ものの輸送にはリヤマを使うことが一般的で、このためにもバスケットより、織物でできた袋物の方が都合の良いことがかんがえられる。実際に、駄獣が多く、現在でもさかんに織物がつくられているペルー南部高地の伝統的な原住民文化のなかでは、バスケットの利用が、まったくみられないのである。これらのことから、中央アンデス地域で、エステーラやバスケットがあまり開発されず、現在も、ほとんど普及していないのは、この地域の牧畜や織物の発達と密接な関係があるとかんがえられる。

3. 浮島

トトラで、居住するために人工の島をつくるのはペルー領ティティカカ湖畔に居住するウロ族だけである。ウロ族が、いつごろから、何故、湖上で生活するようになったのか、という点については未解決の問題として残されている。しかし、少なくとも、スペイン人侵入時代には、ウロ族はすでにティティカカ湖で湖上生活をおくっていたことが知られている。

16世紀、クロニスタのアコスタは、ウロ族の生活について、つぎのように述べている。「ウロ族の部落は、すべて、湖の上に浮ぶトトラのバルサ舟の上であって、それぞれの間で結び合わされ、岩に固定されている。そして、その場所から動きだして、村ごと別の場所に移ってしまい、昨日あったと思う場所を今日探しても、人も村も跡かたもなく消えているようなことすらある」[アコスタ 1966(1590): 184-185]。

当時のウロ族の集落がアコスタの記述どおりのものであるとすると、現在ウロ族が居住する人工のトトラの島は、これとはかなり異なったものである。ティティカカ湖の北端、カパチカ (Capachica) 半島とチュクイト (Chucuito) 半島でかこまれた湾岸にはトトラが密生しているが、ウロ族の居住する島は、このトトラの茂みを利用してつくられる。この島は、一般にスペイン語で *isla flotante* (浮島) の名前で知られているので、以下ではトトラでつくられる人工の島を浮島として記述してゆくことにする。

浮島づくりについては、これまで実際に観察する機会を得ていないが、聞き得た情報によれば、それはつぎのようなものである。ティティカカ湖は、雨期と乾期でかなり湖面が上下するが、浮島のつくられるトトラの茂みのあたりは水深 2~3 m の浅瀬で、トトラの茎は湖面から 1~2 m でている。このトトラの基部をすこし残して刈り取る。この刈りとった跡に、トトラの茎や根、古くなった葦舟などを湖面まで積みあげる。さらに、この上に、大量のトトラの茎を、湖面より 20~30 cm 高くなるまで積みあげる。

これで、一応浮島はできたわけであるが、浮島の周囲のトトラの茂みは、浮島に葦舟をつける部分だけ刈りとり、残りはできるだけ刈りとらないしておく。このトトラの茂みが、島に積みあげたトトラの流出を防ぐと同時に、風を防ぐ役割もはたす。さきにみたように、ウロ族の家は、ほとんどがトトラでできており、強い風には耐えないからである。したがって、その家も、浮島の周囲のトトラの茂みとほぼ同じ高さに作られているのである。

なお、この状態でも、浮島の周囲のトトラの流出はさけられず、また浮島の水面下にあるトトラは腐ってきて、その部分は沈下してくる。ここには、新しいトトラを補充したり、島の周囲も流出したトトラをかき寄せて、しばしば補修がおこなわれる。

いずれにしても、この浮島は、アコスタが記述しているような、葦舟の上にあるわけではなく、まして移動もしない。ただし、浅瀬の湖底から大量のトトラを積みあげただけの島なので、その上を歩けば、当然厚いマットの上でも歩いているような状態にはなる。

さて、ペルー領ティティカカ湖畔には、このような浮島が約 100 あるといわれる。しかし、作業だけをするような小さな浮島を除き、家があって、実際に居住している浮島は約 60 といわれる。この浮島は、大きさも、形態もさまざまであるが、比較的大きいものとしては *Tranipata*, *Huacahuacani*, *Santa María*, *Llachupunco*, *Iska Kapi*, *Kapi Cruz*, *Kala Negro* などが知られている。このうち、もっとも大きく、また家屋数も多い浮島はトラニパタ (*Tranipata*) 島で、ついでワカワカニ (*Huacahuacani*) 島である。

ここではワカワカニ島を例に、具体的に浮島の利用の方法を示しておこう(写真45)。図3は島の実測図である。最大幅が約 50 m、面積は約 1000 m² である。近年、浮島が観光の対象となっていて、ワカワカニ島も、その例外ではなく、トラニパタ島について観光客がよく訪れるところとなっている。浮島の北側に半島状にのびている部分は、観光客用の船をつける波止場というべきもので、最近この浮島につけ加えられた

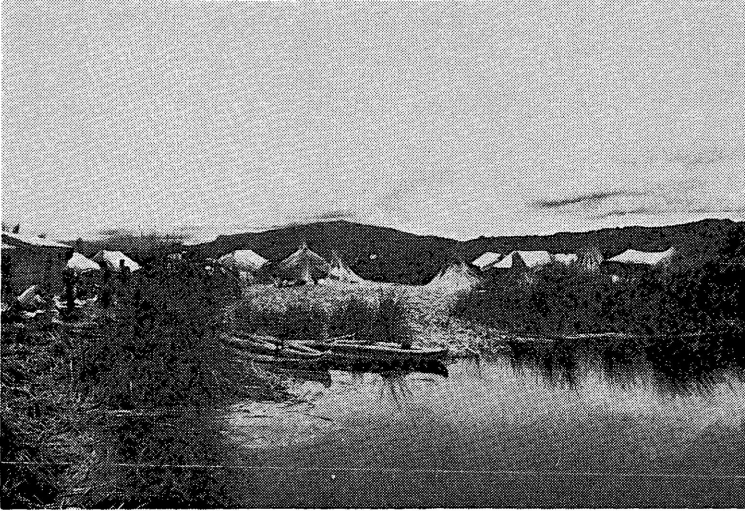


写真45 ワカワカニ島の浮島

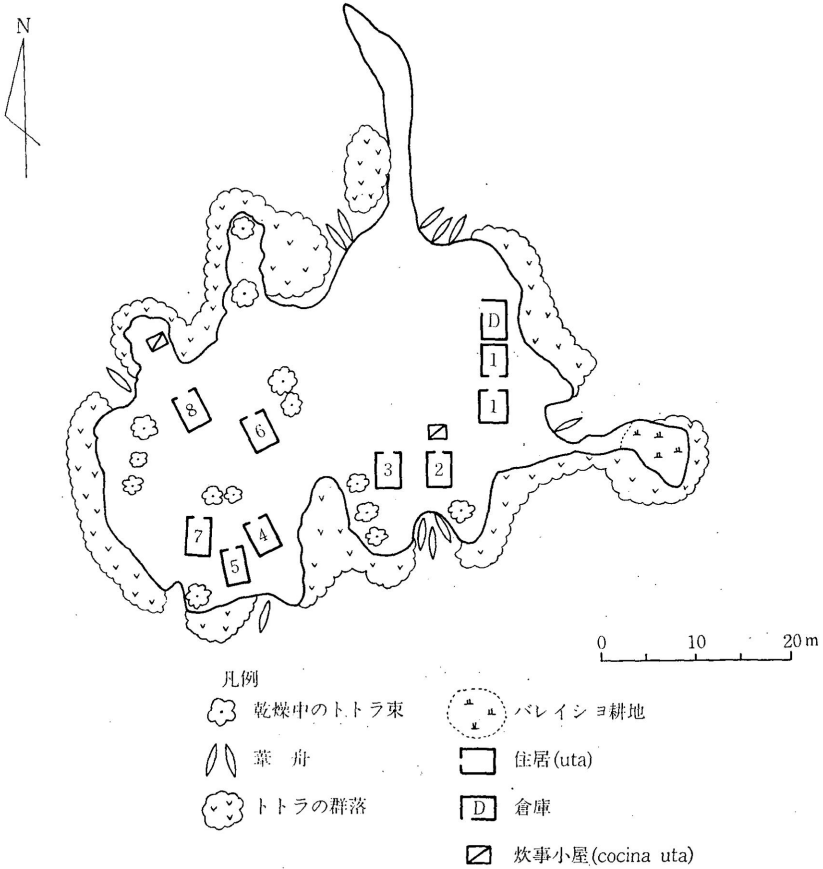


図3 ワカワカニ島の浮島

とされる。

浮島の周囲は、この波止場の部分をのぞくと、ほとんどがトトラの茂みでかこわれていて、部分的に、トトラの茂みが切れているところが見られるが、ここは各家族が所有する葦舟をつけるための空間である。また、図3の右下部の半島状になったところは、バレイショの菜園である。この耕地の土は浮島にはないので、湖岸から運んできたものである。また、家の周囲にみられる乾燥中のトトラの束は、燃料、家の補修、その他につかわれる。なお、図には示さなかったが、家の周囲にトトラでつくった小屋に若干のクイ (*Cavia porcellus*) も飼われている。

この浮島でみられる10戸の家 (uta) のうち一軒だけはトタン屋根であるが、これは島の住民共有の倉庫となっている。残りの9戸は、さきに述べたように、屋根も壁もトトラでできているもので、大きさもほぼ等しい(写真46)。図4は、これらの家の家族構成を示したものである。家屋番号7は夫婦ともにすでに死亡して、現在は無住である。家屋番号4は未亡人が1人で居住している。残りの家の家族構成は、いずれも核家族で、この浮島全体でみると親族のみで構成されている。



写真46 ワカワカニ島の家

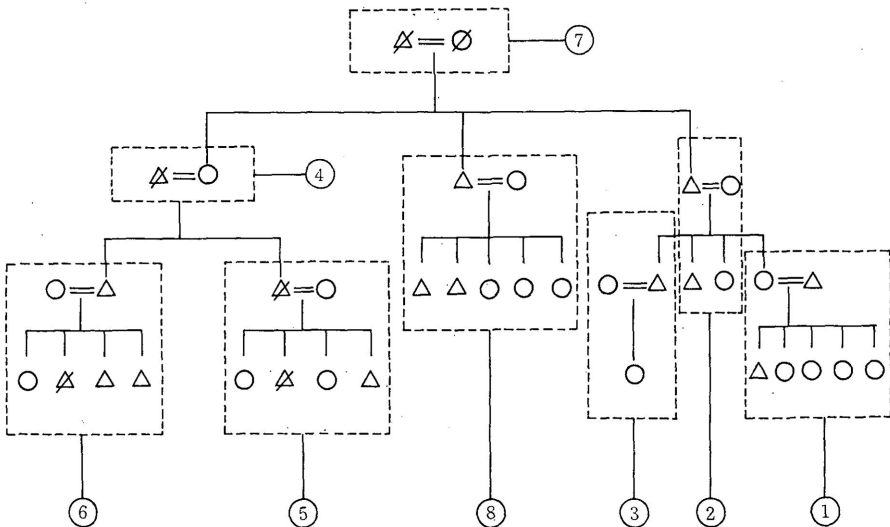


図4 ワカワカニ島の家と家族

これらのうちで、家屋番号1に居住する世帯だけが2戸の家をもっているが、隣接する2戸の北側の家はもっぱら倉庫および調理用につかわれていて、居住するのは南側の家である。この世帯は、家屋番号8と同様、家族が7人と、この浮島では家族数をもっとも多く、寝る以外の空間がないのである。家屋番号8の場合は、家の外にコシナ・ウタ (cocina uta) とよばれる調理用の小屋をもっており、そこで調理がおこなわれる。

このコシナ・ウタという調理小屋は、土製の炉をおいたそのすこし外側に雨や風を防ぐためにトトラで小屋がけをしただけの簡単なものである。この炉の燃料は乾燥したトトラなので、天井のひくいウロ族のトトラの家ではつかえない。家屋番号8以外では、家屋番号2の世帯だけが、この炉を所有しているが、その他はすべて灯油用のコンロをもっており、家の中で使用している。

なお、結婚して新世帯ができると、新しく家がつくられ、そこに新夫婦は移り住むことになるが、浮島が小さい場合は、浮島を拡張するか、両親の住む浮島のちかくに新しい浮島がつくられる。

最後に、ウロ族が、何故、浮島という特殊な環境で生活しているのか、という問題についてふれておこう。さきに述べたように、彼らが、いつ頃から、何故、湖上で生活するようになったのかという点については不明であるが、現在の生業形態からみれば、浮島で居住する利点は明らかである。すなわち、ティティカカ湖畔に群生するトトラの茂みやその周辺でみられる水鳥および魚を生業資源としているウロ族にとって、このトトラの茂みのなかにつくられる浮島は彼らの生業活動にきわめて好都合なのである。

4. 食料, その他

トトラを食料として利用するという情報を得たのはティティカカ湖畔のウロ族およびアイマラ族である。ウロ族もアイマラ族も、ともにトトラの茎の基部約 30 cm ほどをチュヨ (chuyo) とよび、この皮 (sirupi) をはいだ髓を生食する。とくに、ウロ族は、この茎だけでなく、根茎も食用にする。これにはサッカ (sáca) とよばれるものとシピ (sipi) とよばれるふたつがあるが、前者はその年にでた新しい根茎でやわらかく、後者は古い根茎なので固いが、いずれも調理の必要はなく、やはり生食される。

アイマラ族については、その利用の実際を観察する機会を得ていないが、ウロ族では副食的な役割をはたしている。葦舟や家の製作、島の補修などで、大量のトトラが刈りとられるが、その際、茎の基部だけは食用に供される。また、浮島の対岸にある

Chucuito や Puno の市をもってゆき, そこで売ることもある。また, Cardenaz もボリビア領ティティカカ湖畔のアチャカチ (Achacachi) の市で, 食用のトトラの茎が売られていたことを報告している [CARDENAZ 1969: 82]。これらのことから, スリキ島や浮島だけでなく, ティティカカ湖畔ではトトラが広く食用として利用されていることがかんがえられる。

ところで, 考古学的な報告によると, かつてはペルーの海岸地帯でも, トトラは食用とされていた, とされる。2,500 B. C. と推定されるペルー北海岸の初期農耕民の遺跡, ワカ・プリエタ (Huaca Prieta) では, 海産物の利用のほか, ヒョウタン (*Lagenaria siceraria*), カボチャ (*Cucurbita* spp.), マメ (*Phaseolus* sp., *Canavalia* sp.), 棉 (*Gossypium barbadense*), トウガラシ (*Capsicum* sp.) などを栽培, さらに野生の *Scirpus (americanus?)* や *Cyperus* sp., ガマなどの根が食用とされていた [WHITAKER and BIRD 1949: 3; BENNETT and BIRD 1960: 89]。当時は, まだ灌漑の技術は知られておらず, 農耕はもともと川か地下水によって, うるおされた場所にかぎられていた。このような場所には, 当然ガマやトトラが自生していたことが想像され, 上記の栽培植物とともに, これらの野生植物も食料資源として利用されていたのであろう。

したがって, トトラはこの海岸地帯での農耕開始以前の重要な植物性食料資源であったことがかんがえられる。というのは, ワカ・プリエタで発掘された栽培植物のほとんどが, ペルーの海岸地帯に起源したものではなく, 他の地域から導入されたものだからである [PICKERSGILL 1969: 54-58]。また, くりかえし述べてきたように, ペルーの海岸地帯はほとんどが砂漠で, 植物がみられるのはほぼ河川流域のオアシス状のところに限定される。このオアシス状のところで, 食用となる植物はさらに限定され, 主要なものとしてはトトラとガマぐらいであろう。

また, ワカ・プリエタの遺跡が先土器時代のものであり, トトラが生食できることをかんがえると, この可能性はより大きくなる。じつは, トトラを含むホタルイ属の植物を食用にするのはアンデスにかぎらず, その例は世界中でみられる。たとえば, 北アメリカでは, さまざまのホタルイ属植物の根茎, 若芽, 花粉, 種子が食用にされる [YANOVSKY 1936]。また, 根茎と茎だけにかぎっても, インド, アジア, オーストラリア, 北アメリカ, 中央アメリカなどで食用として利用されることが知られ, その多くは生食されるのである [TANAKA 1976]。

アンデス高地部ではトトラにかんする考古学的資料はまったく得られていないが, 海岸地帯と同じことが, この高地部でもいえるかもしれない。すなわち, アンデス高地部は寒さのために, ほとんどが草地帯もしくはサバンナ帯となっていて, やはり食

用となる植物はきわめて限定される。しかも、そこには、ときに「水草を食べる人たち」といわれるほどトトラを食用としているウロ族が居住しており [LABARRE 1963: 575], ティティカカ湖畔には、このウロ族にかぎらず、かなり広くトトラが食用として利用されていたらしいのである [HORKHEIMER 1973: 104-105]。したがって、アンデス高地部でも、ティティカカ湖畔などのようにトトラが大量に自生しているところでは、トトラが食料として、かなり大きな役割をはたしてきた可能性がかんがえられるのである。もちろん、これは、現在のところ、ほとんど資料もないため、推論にとどまらざるをえないが、とにかくトトラの食料としての重要性に、もっと注目してよいだろう。

最後に、以上述べてきたもの以外のトトラの利用について簡単にふれておこう。その他の用途としては、飼料、燃料としての利用がある。エクアドルのオタバロ族では、トトラは牛や馬の飼料として、ペルーのクスコ地方でも牛の飼料として利用されるところがある。また、さきに述べたように、ウロ族の浮島でもクイや牛を飼っているところでは、トトラが飼料となる。

燃料として積極的にトトラが利用されるのは、ウロ族の浮島だけのようである。他の地域でも、トトラが自生しているところでは、これが燃料として利用されているかもしれないが、その重要性はあまり大きくはないであろう。現在、アンデス地域では、灯油のコンロが普及しており、また高地部ではそれに加えて灌木や家畜の糞などの燃料が比較的容易に入手できるからである。

ウロ族の場合、トトラが積極的に燃料として利用されるのは、灌木もなく、わずかの家畜しかいない浮島という環境条件に加えて、その生業と密接に関係している。浮島に居住するウロ族の生業は、これまでみてきたように、狩猟と漁撈で、とくに魚は自家消費する量より、湖岸の市で農産物と交換されるほうがはるかに多い。それは、生魚のほか、天日で乾燥したもの、さらに焼き魚などである。この焼き魚をつくるのに大量のトトラが燃料として必要なのである。

この焼き魚の加工は、一般に一週間に一度、土曜日におこなわれる。湖岸のチュクイトなどで、日曜日ごとにひらかれるアイマラ族の市にむけて、つくられるのである。方法は、いわゆる地炉で、焼き石をつくり、それで魚を焼く。石は、湖岸から運んできたもので、いずれも 20~30 cm 大の扁平なものである。これを焼くための簡単な炉があり、乾燥したトトラが燃料としてつかわれる。焼きあがった石を、直径 2~3 m の円状に敷き、この上に魚を、さらにその上に焼き石をおくため、大量のトトラが必要となるのである。

V. トトラの栽培

トトラは、さきに述べたように、アンデス全域で、海岸低地部から高地部までの泥湿地などで幅広く自生しており、ここでは、これらの野生のトトラが採集利用されている。ところが、先述したように、ペルー北海岸のワンチャコ村だけがトトラを栽培しているところとして知られている [EDWARDS 1965: 16; HEISER 1979: 230-231]。しかし、その栽培の実態については、これまで報告がないので、以下に概要を述べておこう。

トトラは、ポソ (pozo) とよばれる水田状の窪地で栽培される (写真47)。ポソは大きさは一定ではないが、一辺が 5~10 m の正方形ないしは長方形で、1.5 m ほど掘り下げられ、その底には 30~50 cm の深さで、水がはられている。ワンチャコ村では、このポソが 200 あまりあるといわれ、集落からすこし離れた海岸にそって、北方に 1 km ほどの間に点在している。

このポソにはられた水は、村人によれば、海水をポソと海のあいだの海岸の砂が濾過するため、真水であるといわれる。しかし、実際は、海水を利用しているのではなく、後に述べるように、地表ちかくの地下水を利用しているものであり、そのために地表を掘り下げているものと思われる。また、トトラをポソ内で栽培することは、結果的に、海側から吹く強い風からトトラを守る役割もはたしている。折れたトトラは、葦舟の材料として利用できないからである。したがって、しばしばポソの周囲に、古

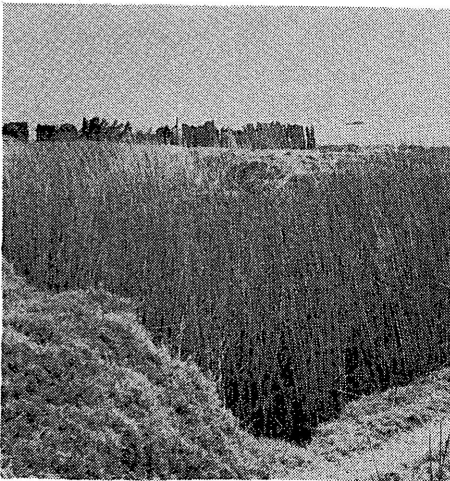


写真47 トトラ栽培用のポソ。後方にみえるのが防風用のタバソン

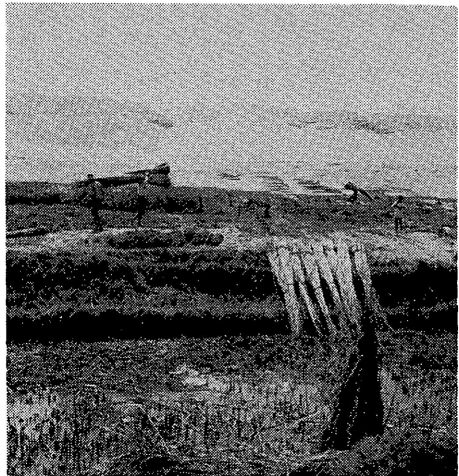


写真48 トトラ収穫後のポソの状態

くなった葦舟やエステーラなどをならべて、タバゾン(tapazon)とよばれる風よげがつくられる。

このポソは、それぞれの家族が所有するものとなっていて、一世帯あたり2つから4つのポソを所有している。したがって、このポソの栽培、管理、利用も家族単位でおこなわれ、さきに述べた葦舟やエステーラづくりの際にも家族が必要に応じて、各世帯所有のポソから採集してきて、つかう。採集方法は、トトラを基部から切りとるだけなので、毎年植えかえるわけではない(写真48)。採集後の切株から、あらたに茎が生育し、約半年で生長するからである。ただし、10年ごとに、このポソ内のトトラは全部植えかえられる。その方が、トトラの生育はより良いものとなる、といわれる。なお、植え付けは、種子ではなく、根茎がつかわれる。

さて、ワンチャコ村におけるトトラの栽培は、村人によれば30~40年前に始まったとされる。それ以前は、ワンチャコ村から数kmのところにあるチム文化の中心地、チャン・チャン(Chan Chan)遺跡のポソに自生するトトラを利用してしたが、ポソ内の水がかれたため、ワンチャコ村に移し、栽培が始められた、という。Edwardsも、これと同様の情報を得ている[EDWARDS 1965: 16]。その情報にもとづいて、1977年 Heiser はチャン・チャン遺跡でトトラの調査をおこなったが、現在、そこではほとんどトトラはみられず、ポソはガマで占められていた。そして、おそらくこれはガマがトトラにおきかわったのであろうと推測している[HEISER 1979: 231]。

ところで、このチャン・チャン遺跡で、かつてトトラが生育していたと思われるところは、矩形の池で、これは水供給用のものか、あるいは畑の跡とみなされるものである。このように地表を掘り下げ、地下水を得て、そこで作物を栽培する農耕方法は、ペルーの海岸地帯では、広く存在し、マハマエス(mahamaes)の名前で知られている[PARSONS 1968; MOSLEY 1969; ROWE 1969]。Kautz らは、ワンチャコ村が位置するモチュエ(Moche)谷で、このマハマエスの発掘をおこない、花粉分析などの結果から、ここではトウモロコシをはじめとする作物とともに、トトラも栽培されていたことを報告している[KAUTZ and KEATINGE 1977: 86-97]。そして、このマハマエスの使用年代は先スペイン期の後期または植民地時代初期と推定している。

現在のところ、トトラ栽培についての考古学的な報告は、この Kautz らのものが唯一なので、それが、いつ頃、何故、栽培されるようになったか、という問題については今後のより多くの発掘報告を待たなければならない。しかし、注目すべきことは、他の地域では、採集利用されている野生植物が、ここでは、古くから積極的に栽培されている点である。これは、換言すれば、トトラがそれだけ、この地域の住民にとっ

て重要な役割をもつ植物であったということを物語るものにほかならない。

VI. おわりに

以上、アンデス地域におけるトトラ (*Scirpus californicus*) の分類、分布、利用、栽培などについて報告してきた。とくに、現在本館で収蔵されている、トトラでつくられた葦舟、家の屋根や壁となるエステーラ、マットなどについては、その製作方法や利用方法をくわしく紹介した。これらの報告のなかで、問題となるところは、それぞれの項で論じてきた。推論にとどまった部分も少なくないが、それらについては資料の増加をまって、あらためて論じたいとかがえている。

最後に、本稿をとじるにあたって、これまで述べてきたことを要約し、今後の問題について、一、二ふれておきたい。

- (1) アンデス地域で、トトラとよばれる植物には、カヤツリグサ科の *Scirpus* spp., *Cyperus* sp., イグサ科の *Juncus* spp., ガマ科の *Typha* sp. などがある。このなかで、現在葦舟の材料となっているのは、*Scirpus californicus* であり、ティティカカ湖のそれは subsp. *Tatora* で、エクアドル北部高地やペルー北海岸の葦舟の材料は、subsp. *californicus* であることを明らかにした。
- (2) トトラ (*S. californicus*) はアンデス地域では、海岸低地部から標高 4,000 m あまりの高地までの泥湿地帯に自生している植物で、草丈が 3~4 m に達し、茎が丸く、細長く、しかもまがりがないので、これらの特徴が利用され、葦舟のほかにも、家の屋根、壁、マットなどにつかわれるなど、原住民文化のなかで、大きな役割をはたしていることを報告した。
 - (a) 葦舟は、エクアドル北部高地 (オタバロ族)、ペルー北海岸、ティティカカ湖のペルー領 (ウロ族) とボリビア領 (アイマラ族) の 4 地点で、製作方法や利用方法を比較検討した。これらの葦舟は、形態や構造に、かなりのちがいがあるものの、系譜的には同じであるとかんがえられ、そのちがいは使用される環境や利用方法のちがいを反映したものとなっている。
 - (b) トトラを編んだり、縄でとじてつくられる エステーラ (estera) の製作方法や利用法を報告した。その製作方法は、アジロ編み (woven estera) と双子編み (twined estera) のほかに、ウロ族の家の壁が wrapped twined weaving の方法で編まれていることを指摘した。
 - (c) これらの製作方法と材料との比較から、従来トトラとして報告されているペル

一海岸で出土したバスケット類の材料は、イグサ科やカヤツリグサ科カヤツリグサ属のものである可能性を示した。

- (d) トトラでつくられる家と島の製作方法や利用方法を報告し、このような特殊な利用方法は、ウロ族の生活環境と社会的背景に、その原因が求められることを指摘した。
 - (e) トトラの食用としての利用方法の存在から、アンデス地域では、海岸地域と高地部の両地域で、農耕以前には食料資源として、大きな役割をはたした可能性のあることを指摘した。
 - (f) トトラの燃料としての重要性も、浮島に居住するウロ族に限定されるが、これも彼らの生活環境に加えて、生業形態に大きな関係がみつめられる。
- (4) トトラの栽培方法、その歴史についても検討を加えた。
- (5) これらの報告を通じて、アンデス地域におけるトトラの利用の発達の背景には、海岸地帯がほとんど砂漠地帯で、高地部は森林限界をこえた草地帯となっていて、そこに居住する人間にとって利用できる植物はきわめて限られていることを指摘した。

以上、主としてトトラ利用の技術的側面について、報告、検討してきたが、今後の問題として、とくに興味ぶかい問題について、ふれておくことにしよう。

その第1番目の問題は、葦舟の表象の意味である。ウロ族の葦舟は、心臓(chuima)、足(challa)、腕(pilla)、鼻(nasa)などの部分呼称が与えられている。また、ワンチャコ村の葦舟も、2本の胴が、それぞれ、母(madre)、息子(hijo)とよばれる2本のトトラ束でできており、さらにオタバロ族の葦舟も、胴の一部が、胸(pecho)とよばれるなど、葦舟が動物を表象していることが十分にかんがえられる。

じっさいに、さきに示したモチーカ文化の土器から、当時ペルー北海岸でつかわれていた葦舟が動物のモチーフによって描かれている(図3)。これらの葦舟が、具体的に、何の動物を表象しているのか、さらには、それがどのような意味をもっているのか、今後あきらかにしたい問題のひとつである。

つぎに、トトラの所有権という問題がある。Šolcによれば、ボリビア領アイマラ族の場合、ティティカカ湖畔に自生するトトラは小面積ずつにわけられ、それぞれの部分は各家族の所有するものとなっている、とされる[ŠOLC 1967: 96]。ウロ族の場合、このような情報は得ていないが、少なくとも浮島の周辺に自生するトトラは、浮島のどの家族が採集してもよい、といわれる。ただし、さきにみたように、浮島は親

族で構成されているものとみられることから異なる親族間におけるトトラの所有の關係については今後の調査に待たなければならない。いずれにしても、ティティカカ湖畔に自生するトトラには、何らかの所有権がみとめられるようで、それが日本における入会権のようなものであるのか、もしそうであるならば、その組織等はどのようなになっているのか、今後明らかにしなければならない問題である。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、神戸商船大学松木哲教授、本館中村俊亀智教授、石毛直道助教授、友枝啓泰助教授、小谷凱宣助教授、藤井龍彦助教授、須藤健一助手の皆さんから文献の拝借ならびにご助言をいただいた。また、本館の吉田集而助手には、草稿を閲読のうえ、ご助言をいただいた。記して、深謝の意を表しておきたい。

文 献

- アコスタ, J. de
1966 『新大陸自然文化史』増田義郎訳 岩波書店。
- BENNET, W. C. and J. B. BIRD
1964 *Andean Culture History*. The Natural History Press.
- CARDENAZ, M.
1969 *Manual de las Plantas Economicas de Bolivia*. Imprenta Icthus.
- COBO, P. B.
1890 *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles.
- DRIVER, H. E.
1961 *Indians of North America*. The University of Chicago Press.
- EDWARDS, C. R.
1965 *Aboriginal Watercraft on the Pacific Coast of South America*. Ibero-Americana 47. University of California Press.
- FARFAN, J. M. B.
1949 La Balsa de Totorá y la Pesca. *Revista del Museo Nacional* 18: 133.
- GAYTON, A.
1978 Significado Cultural de los Textiles Peruanos: Producción, Función y Belleza. In Rogger Ravines (ed.), *Tecnología Andina*. Instituto de Estudios Peruanos, pp. 269-297.
- HEISER, C. B., Jr.
1979 The Totorá (*Scirpus californicus*) in Ecuador and in Peru. *Economic Botany* 32: 222-236.
- HORKHEIMER H.
1973 *Alimentación y Obtención de Alimentos en el Perú Prehispanico*. Direccion Universitaria de Biblioteca y Publicaciones de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- HORNELL, J.
1970 *Water Transport. Origins and Early Evolution*. Newton Abbot.
- 伊藤亜人
1975 「世界の船——その伝統的技術」大林太良編『船』社会思想社, pp. 143-179.
- JOYCE, T. A.
1912 *South American Archaeology*. Macmillan and Co.
- JOHNSTONE, P.
1980 *The Sea-Craft of Prehistory*. Harvard University Press.

- KAUTZ, R. R. and R. W. KEATINGE
 1977 Determining Site Function: A North Peruvian Coastal Example. *American Antiquity* 42(1): 89-67.
- KOYAMA, T.
 1963 The Genus *Scirpus* Linn., Critical Species of the Section *Pterolepis*. *Canadian Journal of Botany* 41: 1107-1131.
- LA BARRE, W.
 1937-1938 The Aymara Indians of the Lake Titicaca Plateau, Bolivia. *American Anthropologist* 50(1). Special Issue.
 1963 The Uru-Chipaya. In J. H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians* 2: 575-585.
- ルンブレラス, L. G.
 1977 『アンデス文明—石期からインカ帝国まで—』 増田義郎訳 岩波書店。
- MASON, O. T.
 1976 *Aboriginal American Indian Basketry*. Peregrine Smith, Inc.
- MOSLEY, M. E.
 1969 Assessing the Archaeological Significance of Mahamaes. *American Antiquity* 34(4): 485-487.
- PARSONS, J. R.
 1968 The Archaeological Significance of Mahamaes Cultivation on the Coast of Peru. *American Antiquity* 33(1): 80-85.
- PEREZ, A. E.
 1978 *Plantas Útiles de Colombia*. Litografía Arco.
- PEREZ, J.
 1951 *Los Musicas de la Conquista*. Vol. 2. Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- PICKERSGILL, B.
 1969 The Archaeological Record of Chili Peppers (*Capsicum* spp.) and the Sequence of Plant Domestication in Peru. *American Antiquity* 34(1): 54-61..
- ROWE, J. H.
 1969 The Sunken Gardens of the Peruvian Coast. *American Antiquity* 34(3): 32-325.
- SAENZ, M.
 1933 *Sobre el Indio Ecuatoriano y Su Incorporación al Medio Nacional*. Publicaciones de la Secretaria de Educación Pública.
- SAGASTEGUI, A. A.
 1973 *Manual de las Malezas de la Costa Norperuana*. Tallers Graficos de la Universidad Nacional de Trujillo,
- ŠOLC, P. V.
 1967 Los Botes Yampu de Totora en el Lago Titicaca. *Annals of the Naprestek Museum* 6: 95-110.
- TANAKA, T.
 1976 *Tanaka's Cyclopedia of Edible Plants of the World*. Keigaku Publishing Co.
- TOWLE, M. A.
 1952 Plant Remains from a Peruvian Mummy Bundle. *Botanical Museum Leaflets of Harvard University* 15(9): 223-246.
 1961 *The Ethnobotany of Pre-Columbian Peru*. Aldine Publishing Co.
- TROLL, C.
 1968 The Cordilleras of the Tropical Americas. Aspects of Climatic, Phytogeographical and Agrarian Ecology. Geo-Ecology of the Mountainous Regions of the Tropical Americas, In C. Troll (ed.), *Proceedings of the UESCO Mexico Symposium*, pp. 15-56.

山本 アンデス地域, トトラの民族植物誌

TSCOPIK, H. Jr.

1963 The Aymara. In J. H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians* 2: 501-573.
Cooper Publishers, Inc.

VALCARCEL, L. E.

1978 *Historia del Peru Antiguo*. Editorial Juan Mejia Baca.

WHITAKER, P. and J. BIRD

1949 Identification and Significance of the Cucurbit Materials from Huaca Prieta, Peru.
American Museum Novitates, No. 1426: 1-15.

YACOVLEFF, E. y J. C. MUELLE

1932 Una Exploración en Cerro Colorado. *Revista del Museo Nacional* 1: 29-103.

YACOVLEFF, E. y F. L. HERRERA

1934 El Mundo Vegetal de los Antiguos Peruanos. *Revista del Museo Nacional* 3: 242-322.

YANOVSKY, E.

1936 *Food Plants of the North American Indians*. United States Department of Agriculture.